

第4回

静岡アートドキュメント

2014

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2014

静岡アートドキュメント 記録集

SHIZUOKA ART DOCUMENT 2014

静岡アートドキュメント 2014 を終えて

2014年11月29日から12月7日にかけて第4回静岡アートドキュメントを開催した。前回からの継続的テーマである“市民とのコミュニケーション、歴史的資産の再活用、若きクリエイターの育成”を目標に掲げ、SPACー静岡県舞台芸術センターとの共催により富士山を望む日本平中腹に位置する「静岡県舞台芸術公園」をメイン会場とし、地域の環境教育の実践拠点である「遊木の森」をはじめ「大谷の古民家・大村邸」「静岡大学ビオトープ」「萬象寺」といった有度山地区(日本平)周辺に作品を設置した。

実行委員は岐部琢美、乾久子、長橋秀樹、白井嘉尚、蜂谷充志、奈木和彦、柚木康裕、夏池篤の8人で、できるだけ広範な視点からの展覧会運営ができることを心がけた。出品作家は30名(28名と2グループ)で前回の39名を下回るが、京都、東京、神奈川、名古屋等の県外に在住する作家がこれまで以上に多く参加している。これを機会に、参加者を中心としたシンポジウム「静岡アートドキュメント」ー地域のなかで、地域をこえてーを企画し、この展覧会を県外からの視点と県内の思いを重ねながら客観的に捉えることを試みた。

舞台芸術公園は前回に続き2回目の会場使用である。演劇表現の場であるという特性を考慮し、テーマとして「身体性」を思考する中で、出品者の長橋(絵画とパフォーマンス)+村上(写真)+山内(映像)によるコラボレーションが実施された。県内大学の学生の交流という点では前回より後退し、食堂棟「カチカチ山」での常葉大学の学生作品展示のみが実施された。また加えて、ヴァージニア・コモンウェルス大学からジャック・ワックス教授(クラフト)を招聘し、作品展示を通してアメリカの美術教育の一端が垣間見られる機会とした。

大谷の古民家も前回に続いて2回目の会場である。用宗から移築された家屋は、母屋と蔵の部分からなり、建築に加え多くの収集品がある中での展示は、前回からのテーマである歴史的資産の再活用を引き継いでいる。母屋の畳の上ではドローイング作品が展示され、蔵ではユニットを組む日本とドイツに住む作家による交流の記録が展示された。古民家のオーナーも収集品の開示に積極的に関わった。

遊木の森は自然の豊かな会場で、その環境を生かした多くの作品が展示された。同時に、そこを管理するNPO法人しずおか環境教育研究会と静岡アートドキュメント出品者による子供たちを対象とした共同のワークショップが実現した。

また短期間ではあったが、全国でエコロジー系ワークショップを展開しているCASA PROJECTを招待しワークショップが実施された。二つのワークショップが開催されたことで、会場が作品の展示場所であるだけでなく、市民とのコミュニケーションの場として多くの人たちの集う所となった。

静岡大学のビオトープでは、その生態系の環境のなかでのインスタレーションとそこにあるログハウス内で平面作品が展示された。加えて日本初の学校ビオトープの誕生秘話に関するトークとコントラバスのソロライブが企画された。

萬象寺は日本平の清水側に位置するお寺で、富士山を正面に眺望できる景観のすばらしい会場である。お寺での展示は、第1回展の教覚寺、第2回展の西藏寺に続く3回目となるが、床に敷かれた毛氈(もうせん)と壁面上方にめぐらされた五色幕など色彩に満ちた空間での展示となった。壁面にはその色彩を意識するように色鮮やかな平面作品が、床にはお寺の石を使ったインスタレーションが展示された。

会場運営にあたっては、5つの会場をそれぞれの実行委員が自主性を持って進めた。各会場の詳細に関しては担当実行委員の報告を参照していただきたい。

今回実現できなかったイベントとして、アートの無人販売があった。平澤観音側から遊木の森に向かう途中には、10箇所の野菜の無人販売所があり、そこでアート作品を販売しようという計画である。アートの価値とは何かを問いかけるには、絶好の機会であると考えたが、運営にあたっての十分な検討期間がなく断念せざるを得なかった。

有度山(日本平)の周辺に点在する会場は公共交通の便が悪いので、車での移動手段を持たない方のために会期中2回ではあるが予約制の巡回バスを用意した。作品の設置、会期中の受付、会場案内等では学生の協力を得た。ポスターおよびキャプションはデザイナーの鳥井素行氏に作製いただいた。展覧会運営にあたっては、公益財団法人朝日新聞財団、ふじのくに文化芸術振興財団より助成を、株式会社AKAISHIより協賛をいただいた。最後に2007年から2014年まで4回の静岡アートドキュメントを開催してきた実行委員会が、公益財団法人静岡県文化財団より第26回の地域文化活動奨励賞を受けたことを報告いたします。

静岡アートドキュメント実行委員長 夏池 篤

静岡アートドキュメント 2014

会期：2014年11月29日^土ー12月7日^日

会場：^A 舞台芸術公園

^B 遊木の森 (ゆうきのもり)

^C 静岡大学ビオトープ

^D 大谷の古民家 (おおやのこみんか)

^E 萬象寺 (まんぞうじ)

► RELATIONAL EVENTS

シンポジウム 「静岡アートドキュメント」ー地域のなかで、地域をこえてー

舞台芸術公園作品紹介ツアー

舞台芸術公園「楢円堂」 朗読パフォーマンス

「ポーチやレジャーシートをつくろう! by CASA PROJECT」

「秋の森づくり県民大作戦」

木を使ったインスタレーション

コントラバス ソロライブ 「topos ー場ー」

学生作品と海外招聘教員作品展示

渡辺 五大





飯室 哲也

IIMURO, Tetsuya

1947年生まれ。武蔵野美術大学美術学科油絵卒。
「観念、感覚、事物、空間」の間を往来する表現を、多面的に表現しています。1970年代の後半に萌芽が始まり、80年代に多々展開した「線状の空間感覚」は、その後も変容を加えて、現在まで継続している、私の主要なシリーズ作品です。主に枝や板、ステンパイプ等、様々なものを線状に組み合わせて、室内外に設定します。神奈川県箱根町在住。



線状の空間感覚 2014

枝、丸太、板、ステンレスパイプ、石、その他
約1000 ～ 1200 / cm

この作品は、室内設定として制作を進めて、2014年の10月の個展で展示しました。同時に次に静岡アートドキュメントでの屋外設定を予定して制作を継続していました。屋外設定では、室内設定にいくつかの部分を加える形で設定しようと、私はイメージしていました。

「線状の空間感覚」の作品シリーズは1980年から継続しています。今回の作品は、木の枝などの木の素材とステンレスの金属を、「対照の同存」として意識して扱っていた、その当時の感覚に近いものがあると私は感じています。二つの「リング」の扱いは、私の表現の個人史へのノスタルジーかもしれません。ものによる線性に誘われて生まれる起伏の連なりと断絶の設定「線状の空間感覚2014」が、舞台芸術村の大地の中に、記録され、記憶されることを私は願望として想っています。

静岡アートドキュメント 2014 A 舞台芸術公園



小川 佳夫 OGAWA, Yoshio

1962年藤枝市生まれ、90年東京藝術大学大学院修士課程油画専攻修了。アーティストヴィザを取得し1995年～2007年パリ在。現在東京在。私が描きたいのは「記憶の底の光景」だ。具体的な景色ではない。甘味、温もり、湿り気、匂い、官能・・・五感あるいは六感のどこかに潜み、ふとした拍子に記憶の水底から立ち上がってきて束の間「見えた」と感じる、そういう景色だ。聖も性も包含する人間の「生」。その痕跡を画布の上に表現したい。



Canaan5（左側） Canaan1（右側）
キャンバスに油彩
27.3 cm×22.0 cm

展示会場に充てられたSPAC楢円堂は、土壁がほぼ等間隔に12面あり、自然な材質による存在感を静かに主張していました。私は12壁に一枚づつ油彩作品を展示することによって、壁の魅力を活かし、空間に心地よい緊張を表現できればと考えました。

今回の作品12枚は壁を契機にして、壁に触発され、徐々に画布に重ねられる絵の具によって絵肌を生み出していきました。タイトルの「カナン」とは旧約聖書に登場する約束の地です。乾いた土地のイメージも与えてくれる壁を背景に、乳と蜜の流れる豊饒な土地としての表現を試みました。アトリエでは絵の具を溶き、塗布し、画面と対峙しながら、楢円堂の壁と自作との調和やコントラストをいつも意識していました。





北川 純 KITAGAWA, Jun

幼少からプリントゴッコ（簡易印刷機）で年賀状作りに精を出し、そのまま成長しシルクスクリーンのTシャツ作りにはまる。Tシャツの大量生産、販売を試みるも大して売れず、在庫処分のため駅前の裸体銅像に着せてみると意外と好評で現代アートの世界に足を踏み入れる。大量のTシャツを消費して野外大型アートを展示したり、その中に風船を入れたり、色々な素材を使い人をびっくりさせるようなモノを作ることを生きがいとするようになる。現在はエロTシャツ作家と現代アート作家の二枚看板で活動中。



真空パックされた女
ビニール
1300 cm

皆さんから「おっぱいが小さい!」と指摘された。やっぱりみんな大きいのが好きなのね。

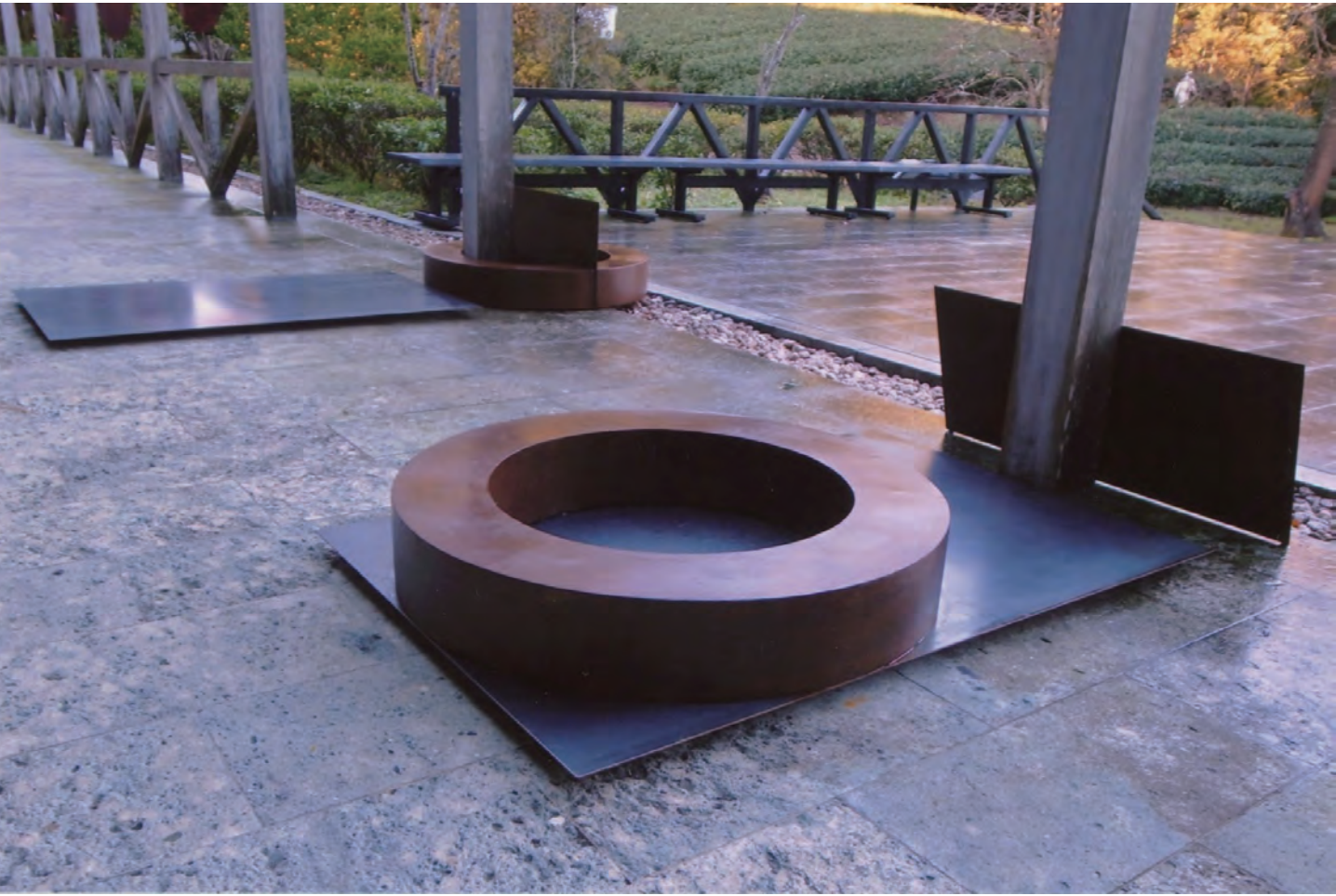


静岡アートドキュメント 2014 A 舞台芸術公園



岐 部 琢 美 KIBE, Takumi

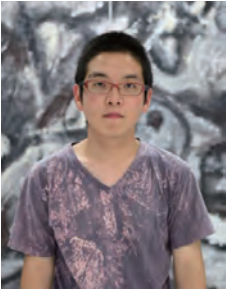
1946年生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻専攻卒業。同大学彫刻研究室副手の頃より、鉄を素材とした立体作品を作り始める。近年は、存在と認識のうつろいのようなものを取り込みシンプルで緊張感のある作品を提示することを心掛けている。個展、グループ展を中心に国内外で作品を発表する。海外展は、フランス、タイ、フィリピン、韓国など。また、県内のアートプロデュースにも多数携わる。藤枝市岡部町在住。



THE PRESENT STATE
鉄
230 cm×90 cm×40 cm (左側) 180 cm×90 cm×40 cm (右側)

日本的な空間意識を大切にしつつ、「原初的な風景」「有機と無機の両面を備えたもの」「空間と物質との関わり」などにこだわり作品を作っている。また、「もの」と「もの」との関係や、時間の経過に伴う「もの」の変化など、形に表れにくいことから「こと」は、私にとって存在と認識のうつろいを取り込むことに向かわせる。鉄はそれを十分可能にしてくれる魅力的な素材である。また、「存在」「意識」「状況性」その3つを表現要素として使いたい。そのために次のようなことを心掛けている。空間を取り込むこと。時間と空間を生み出すこと。不純物を省き、素材そのものを見せること。物事
の存在を確定しないこと。空間や場の活性化。重力からの解放。間を意識すること。虚と実の狭間を行き来すること
などなど。
作品が周囲の空間とどのような緊張関係を築くかを提示し、時間の経過に伴うものの「有様」を表出したい。

静岡アートドキュメント 2014 A 舞台芸術公園



佐野 翔 SANO, Syoh

1991年富士宮市生まれ。2014年現在、静岡大学大学院教育学研究科2年。学部卒業制作時、長方形の大きな紙に水性塗料で、ためらいなく思いついたイメージを敷き詰めて行く「即興絵巻」を制作。それをきっかけとし、大きな支持体を生かしたパフォーマンスや会場の壁を絵で覆い尽くす展示形態を取る。全身を使った筆のストロークや、叫びやうなりを伴う演技的描法から、単純かつ素朴に「生きている絵」を描くことを試みている。



calling
障子紙、ビニールシート、水性塗料ほか
300 cm×96 cm 計46/パーツ

野外劇場の構造をみた時、舞台の両翼部分に「役者」の必要性を感じた。劇場という額縁と、佐野翔という人物の思考が重なった時、演劇的要素を多分に含んだ物語を描き、或いはそこで観客に哲学的思考を行ってもらいたい。
- calling - 神は自分の中にいる - 命の存在肯定への希求、それは美術という学問と両立し得るのか。否、そもそも学問というのは純化され、それは批判的見方をすれば閉鎖していくものなのだろうか。様々な意見があるだろう、しかし私は感じる、そこを個人的見解に委ねるというのはあまりにも無責任で、逃避的姿勢であると。
アートドキュメント、というイベントそのものとの闘いも行わねばならない。単純かつ複雑な問題を抱え、地域型美術というアートシーンの未来はどのような展開を見せるのか。多様化していく価値観の中、私自身も象牙の塔を少し遠くから見つめ後ろの景色を愛おしむことをくり返している。もしかしたらこの悩みは不毛かもしれない。





田中 俊之 TANAKA, Toshiyuki

1969年生まれ。東京造形大学(彫刻専攻)、Virginia Commonwealth University (M. F. A) 卒。
ヒンドゥーのリンガは生産のシンボル。現在、ファリシズムの象徴は破壊を意味するものばかりが目立つ。何時からファリシズムはそうなってしまったのか。幸いなことに、アジアでは今でもおおらかなファリシズムが生活のなかに息づいている。それは一見、野蛮なものと理解されるかもしれない。しかし、本当に野蛮なのはどちらのファリシズムなのだろうか。



バナー／ banner
布、羽毛、スチール
H250×W120×D8 cm

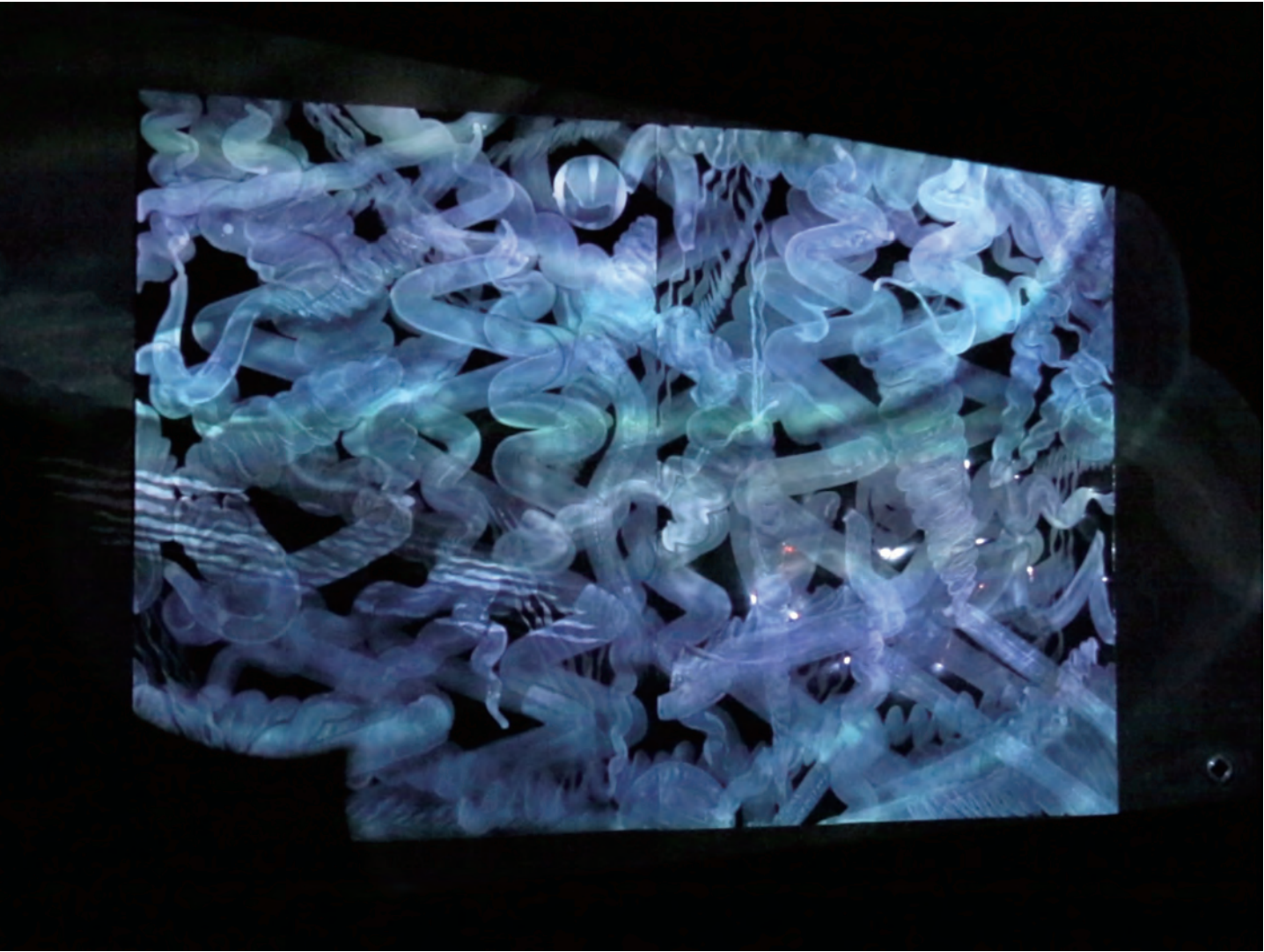
東京、中野。屋上にある仕事場での作業中。隣接する中学校の屋上にある風力計が風の強い日にはブーンとうなり声をあげて尾を振りながらプロペラが勢い良く回っている。誰一人立ち入る事のないその場所には風力計とおそらく過去に使われていたはずの旗を掲揚する為のポールがある。
雨の日、風の強い日、雪の日、暑い夏の日。一年を通してその場所では、一日として同じ日はない。
地面のほとんどがビルで埋め尽くされている都市では、残された地面はあまり陽のあたらないビルの隙間にある公園か学校の運動場くらいしかない。存分に陽が当たる場所はおそらく屋上が一番いいだろう。頭上には何も無い開けた空間。時折高い所をヘリコプターが通り過ぎる。喧噪とは少し離れた空と接するその場所には雀や鳥が集まってくる。





寺田佳央 TERADA, Kao

1975年生まれ。武蔵野美術大学院油絵コース修了。
協定留学によりパリ国立美術学校に留学。卒業後、武蔵野美術大学パリ賞にて再度パリ1年、その後ベルリンに1年滞在制作。主にペインティングの制作に取り組む。素材と支持体の特性から新たな筆触や物質の表現を導き出し、主に水にまつわるイメージを使って、不安定でありながら躍動感のある力学による画面を基底として制作している。素材を生かしたドローイングの特異な表現を映像化する作業も行う。



Untied / United
映像、ドローイング
映像:可変 ドローイング:109.1 cm×157.6 cm

黒い光沢性のある紙に描いたドローイングから映像を作成。同じ素材の紙に新たにドローイングを描き、それをスクリーンとして、作成した映像を投影した。動く絵と動かない絵が重なる。しかし黒い光沢性のある紙に光は反射しないため、映像は映らない。スクリーンとしてのドローイングは、絵具で描かれた部分だけが可視領域となる。一方、映像の中の黒い領域は光を発しない。映像の中で、像が描かれた部分だけが光に置き換えられて投射されるため、両者の描かれた部分(光を発した反射する)が重なった時だけ、私たちの目に像が届く。

舞台芸術公園楯円堂からは富士山が見える。舞台は地下にありとても暗く地中に潜ったように感じる。楽屋は、さらに奥にあり、洞窟のようでもあり、大きな姿見が複数反射しあい、魔術的な空間でもあった。描く時、富士山の地下のようなイメージを思って、制作した。

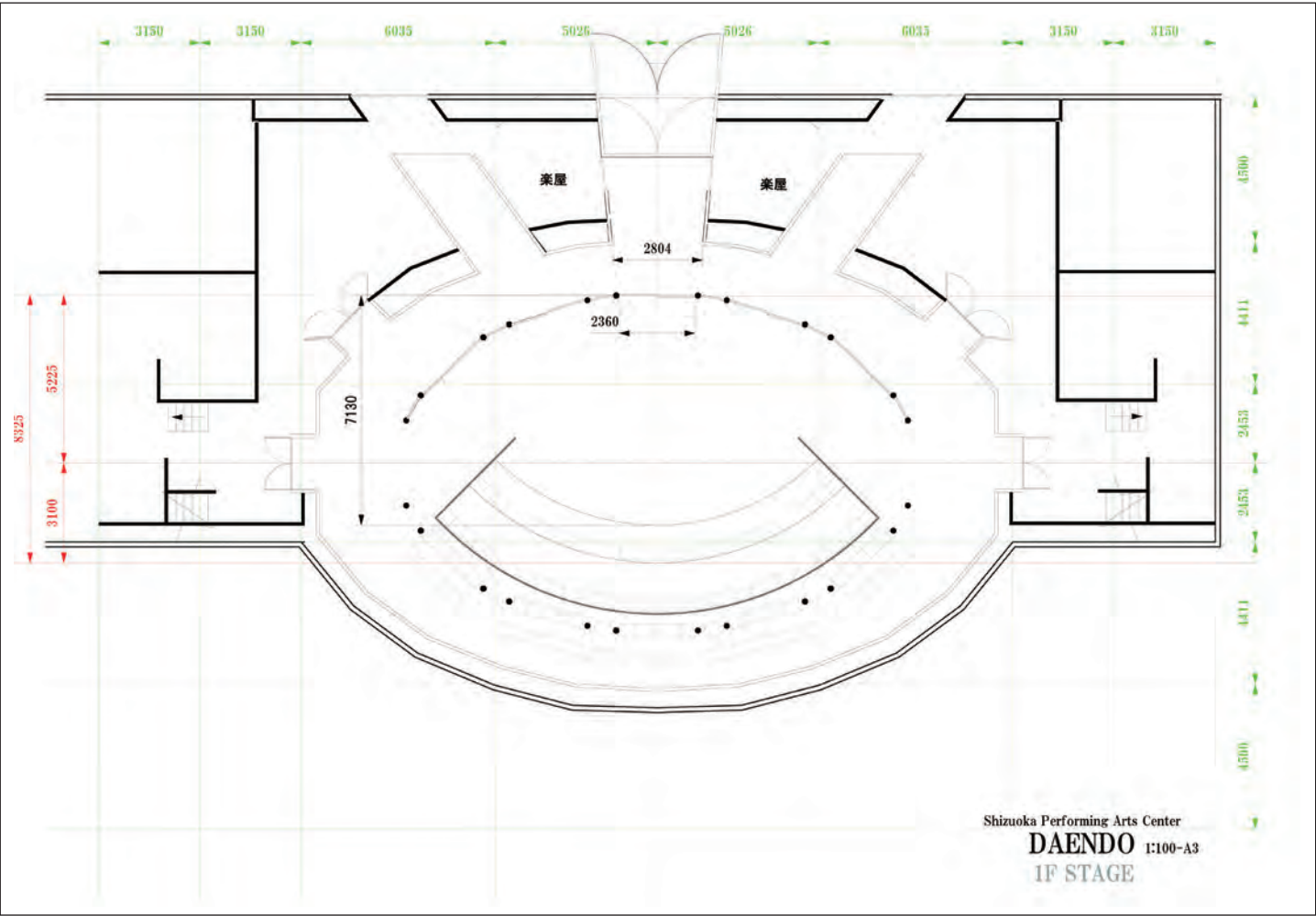


静岡アートドキュメント2014 A 舞台芸術公園



長橋 秀樹 NAGAHASHI, Hideki

1963年静岡県生まれ。
高校3年次、沼津美術研究所(沼津市)で美術の世界に飛び込み、
2年の浪人を経て東京藝術大学油画専攻に入学。同大学修士美術研究科へ進学し、故榎倉康二に師事する。榎倉氏の影響の基、
絵画に潜む身体性(身振り)と支持体であるキャンバス(場)の密接な関係について腐心しながら早四半世紀が過ぎてしまった。
個展:2014年(4月)Hino Gallery(東京)

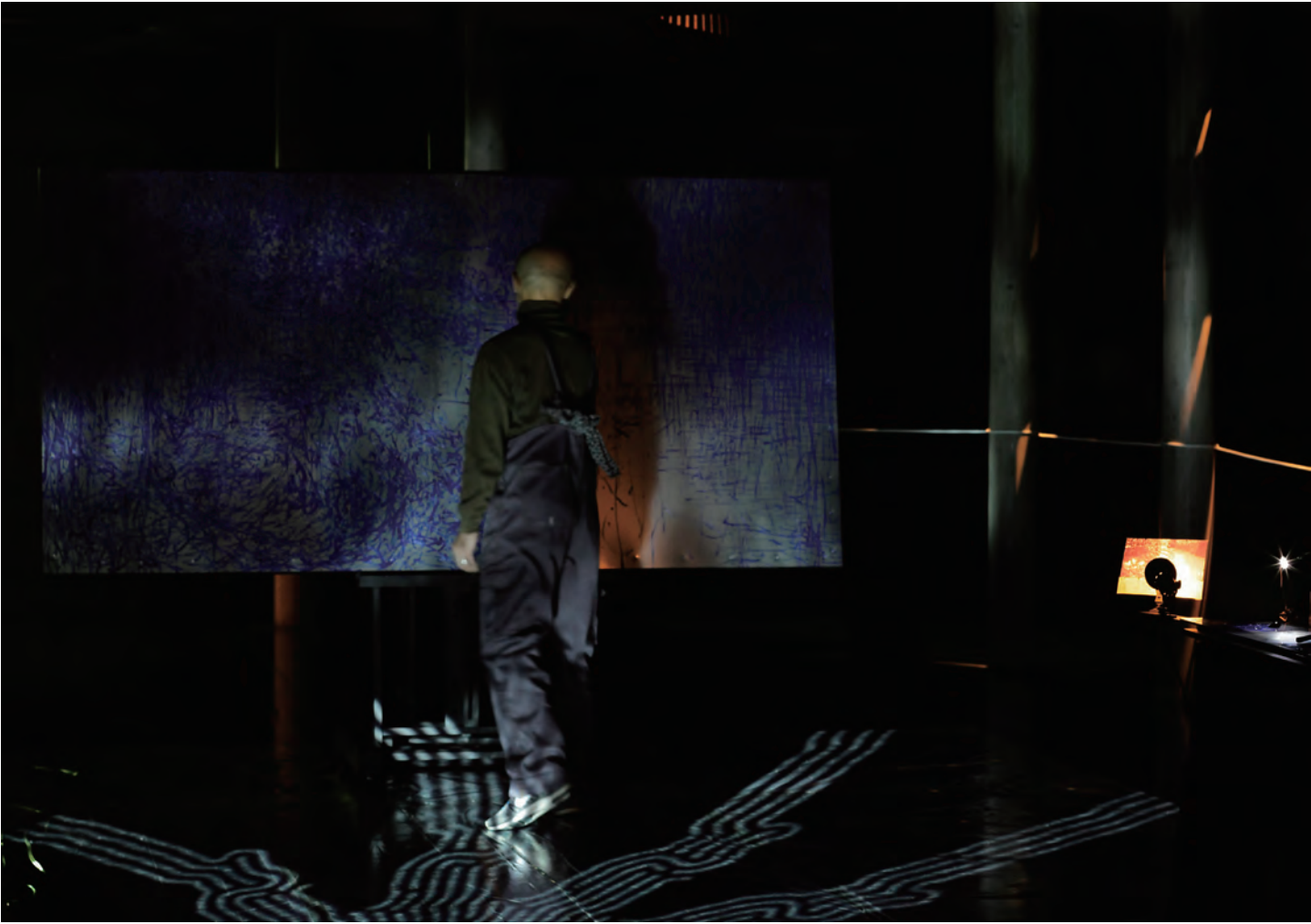


出典:公益財団法人 静岡県舞台芸術センター

失われた窓枠 The lost window frame

イーゼル、木枠、金属板、油彩
240 cm×120 cm
PHOTO : 村上 慎二

絵画制作に携わる者にとって、“窓枠”つまり“制度”は絵画が絵画として成立する前提条件である。さらに伝統的な視点から絵画を思考すれば、絵画は光を所有することのできる芸術である。しかし自明のことであるが絵画を実態的に照らす光の存在なしに絵画は鑑者の網膜に映し出されることはない。
今回ここに提示する状況は絵画(という制度)が鑑者の立場から“見えるもの”として成立することを思考する試みであり、かつ作者はメタ絵画的パースペクティヴに立脚しながら、現場(舞台)へ身を投じる行為である。



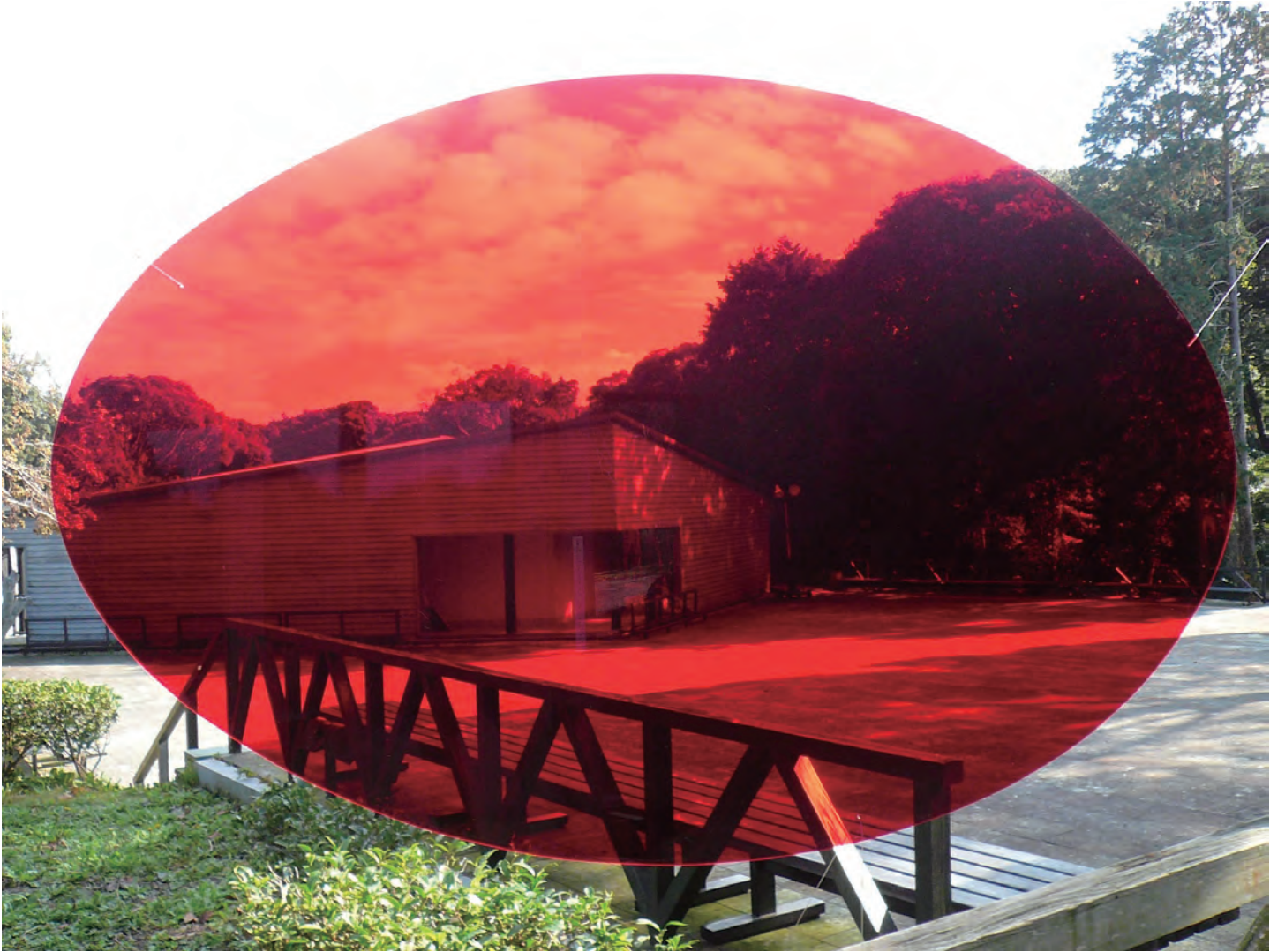
静岡アートドキュメント 2014 **A** 舞台芸術公園



松浦 澄江＋望月 瞳（写真）

MATSUURA, Sumie＋MOCHIZUKI, Hitomi (Photograph)

東京藝術大学卒業。国際美術家連盟（IAA）Japan 会員。
銀箔・日本画絵具・和紙などの日本の伝統的素材とLED やコンピューター などの現代の素材を融合して、どのような国の人にも静かにコンセプトが 浸透する場を作りたいと考えている。
今回の作品は 2011 年個展から引き続き、大震災以後の「命」がテーマとなる。写真家 望月瞳（NY 在住。広告・ファインアート両分野で活躍中）とのコラボ。



歪んだ赤い丸の上に座っている私たち

アクリル板、テグス、写真プリントビニール
400 cm×1500 cm×400 cm

このインスタレーションは2011年3月11日の大地震と原発事故の後の冬、発表した「Breathe」の姉妹作。「Breathe」は呼吸のリズムでフェイドインとアウトを繰り返す日の丸の旗のような形で国や自然の命を象徴した作品です。その「赤い丸」を遠近の歪みのままに「赤い楕円」として、この舞台芸術公園に設置。吊り下げられた楕円からは変色した世界が、椅子型の楕円の下には写真家 望月瞳さんの原発反対デモの写真が透ける。写真は2012年8月10日国会議事堂前での子供や若い母親も参加したデモの記録で、白い風船を「平和の象徴」として持つ。環太平洋火山帯が活動期に入り富士山の噴火さえ予想されている中で原発再稼働が決定される矛盾。沢山の反対デモが報道されない恐ろしさ。世界の変貌に気づき「命」にもっと敏感になる事を願った作品です。



村上 慎二 MURAKAMI, Shinji

1963年 神奈川県生まれ。沼津美術研究所で長橋秀樹氏と出会い、今回の楢円堂展示へと導かれた。静岡酒を愛飲する身が、静岡のバカスカな劇場空間で展示出来たことはかなり上機嫌。さて、写真黎明期に「ニエブスの支度のととのった食卓」という謎多き作品がある。またダゲレオタイプには、強烈な物質性の中に宙吊りにされた影がある。これは銀表面の奥の空間から放たれる光(実際は反射光だが)に支えられている。これら19世紀に勃発した問題を動因に制作している。忘れられかけているが、今でも有効なテーマだと思う。

写真について、あまり語られないこと・・・

写真に変わる急速な変化の中で、語られることのなくなっていくだろうと思われることについての掘っつかを、この機会に提示しておこうと思う。

明るいところでフィルムを開けて感光させることと、
真っ暗なところでフィルムを開けて感光？させること。
このどちらも何も写っていない、失敗写真の状態がある・・・
それら両極の間に階調(グラデーション)が生ずる。

階調を得るにはまず、闇を用意する・・・
それは部屋(カメラ)で空間から仕切られた領域。
そこに一筋の光が射し込むことで、
形は階調の内に、さも現れたかのように見えることだろう。

まっ暗間だけを撮影することはなく、
光だけを撮影することもない。
暗間だけを見ることもまずなく、
光だけを見ることもまずない。

人は本当に真っ暗な、
深淵の闇を体験することはまずない。
本当に明るくて、
均一に真っ白な状態を体験することも稀である。

新月の夜に、外灯の全くない山奥に居たとしても、
空は思いのほか明るい。
森の奥深くに、あるいは洞窟の奥深くに入り込めば、
真っ暗な闇を体験出来るかもしれないが・・・

あなたは暗間では幻影を見るだろう・・・
恐怖心は記憶を呼び起こす。
暗間そのものを見、暗間そのものを撮る・・・
「真っ黒な失敗写真」は本当に失敗なのだろうか？

暗間の写真に幻影をみること・・・
それは見る人の不穏な記憶を呼び起こす。
人は言うだろう・・・
「そのようなことが起これば凄いいけれど、その写真はいいらない」と。

冬山で霧に包まれればホワイトアウト・・・
うかつに動けば、遭難の恐怖に導かれる。
明るさの中でも人は戸惑う・・・
光の中でも暗間と同じ。

暗間そのものを見よ・・・
暗間そのものを撮れ。
光そのものを見よ・・・
光そのものを撮れ。

闇と光・・・
両極ではフレームが意味を成さなくなる。
失われた窓枠。

THE LOST WINDOW FRAME 失われた窓枠 2014

THE LOST WINDOW FRAME 失われた窓枠 2014

A3 ファイル、A3 インクジェット出力(20 頁)、テキスト及び写真、木製置台、ライトスタンド、LED(1w)照明
A3 ファイル見開き外形 67.7(w)×43.5(h) cm 木製置台 116(w)※×98.4(h)×56(d) ※天板寸、脚最幅部123(w)

舞台縦横の動線が、劇場の典型に比して顛倒している楢円堂空間に、長橋氏の描画行為に導かれた「身体」の動きと、山内氏の…喩えるならば木漏れ日という「自然」が投影される。客体者の参入に際して、主客逆転の祝祭的空間を提示するための一種の妨げ(立ち止まる場)として朗読台的な私のファイルを置く。そのテキストと画像で構成される内容が、この状況で詳細に読み込まれることは困難だが、インスタレーションの意味性においては充分な存在だろう。「失われた窓枠」という、近現代美術が19 世紀末に見失った身体性に関する『「反時代的なものの証人」の名残※』の、私としての解釈の一部を提示してみた。なお、初日に行った朗読パフォーマンスとあわせて、写真の忘れ去られた問題を、視覚的なだけではなく「プレス」として提示する機会を得ることが出来たと考える。

※参考引用書 ロラン・バルト著「明るい部屋」 F. W. ニーチェ「反時代的考察」等



楢円堂入口側から見た村上ファイル作品・置台と長橋作品・山内作品の関係性



山内 啓司 YAMAUCHI, Keiji

1955年生まれ。
日本大学芸術学部美術学科絵画専攻。
1994年より、浜松の町工場を拠点に機械オブジェなど発表。
2004年より、GALLERY CAVE主宰。
自然現象から生まれた映像表現を用い、インスタレーション
空間の中で、ダンスパフォーマンス、音楽など、異なるジャン
ルとの融合を企画する。磐田市在住。



「失われた窓枠」の映像
映像
サイズ可変

ビデオフィードバック現象による光の生成は、光と闇との相克の中で現れる境界の形である。闇の中に一点の光を垂らした時、その光は広がり、すべてを覆い尽くす光の壁になるか、縮小して消滅し、漆黒の闇に戻るか。その境界上に現れる、光と闇のせめぎ合いから生まれた、危ういバランス上にある形の揺らぎ。

単純な数式によって導き出される波の形が、無限に複雑な自然や生命を支配している。絶え間なく変化し、生成と消滅を繰り返す波の形は、神経細胞と同じ形であり、同じ動きをしている。美術により、人は何を表現しようとしてきたか。太古の昔から人々は美を探し求め、様々な表現方法で形にした。美は自然の中に隠されているものなのか、人間が発見した概念なのか、我々の身体や意識の中にあらかじめ備わるものなのか、それとも、存在に内在している原理そのものか。

ここに今現れている形は、人間が作り出したものではなく、光それ自体の原理によってのみ出現した形である。





渡 辺 五 大 WATANABE, Godai

1967年生まれ、神奈川在住。92年東京藝術大学大学院彫刻専攻修了。90年代より金属彫刻、インスタレーション、鑑賞者参加型のアートプロジェクト等を発表。アートユニットカ五山としても活動中(2007〜)。光のおぼけ煙突アートプロジェクト(2006〜10東京)、彫刻-林間学校(2008長野)、AOBA+ART(2008神奈川)、越後妻有アートトリエンナーレ(2009、2012新潟)、鎌倉巡空(2009神奈川)、うちのDEアート(2011新潟)、千手の絆キャンドルナイトアートプロジェクト(2012東京)、ぎゅっとねんどアートプロジェクト(2013静岡)、瀬戸内国際芸術祭(2013香川)ほか



有度山玉座
(半球体) ステンレス (フレーム) 鉄に塗装、その他
幅200×高さ200×奥行200 cm (半球体) 直径90 cm

- ・ 内容：来場者が座れるハンギングチェア型立体作品。
- ・ 吊り下げ方法：ロープによる3点吊り。
- ・ フレームはボルトとナットによる組み立て式。



井上 明彦

河村 洋子

岸 美智代

木下 琢朗

ゴンザレス・
ウィルフリド

塚本 南波

中村 昌司

夏池 篤

丹羽 勝次

山本 晴康

樂土舎

遊木の森 ●●●●●●●●●●●●●●●●

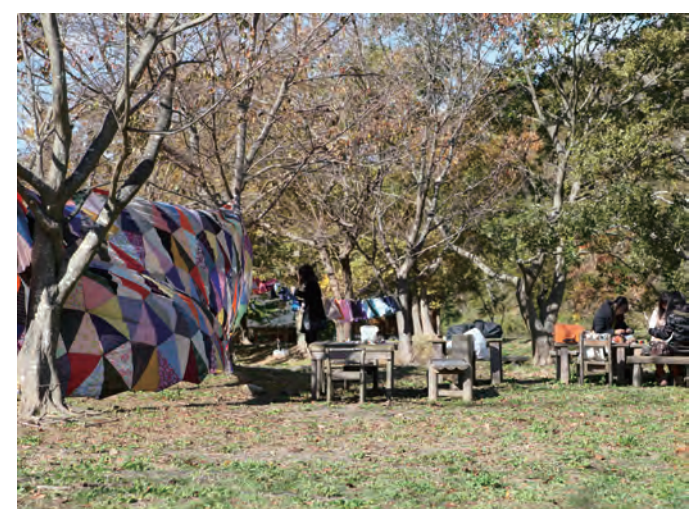
日本平パークウェイの途中に位置するこの森は、普段は地域住民の散歩コースであり、NPO法人しずおか環境教育研究会が子供を対象とした自然教育を展開している。この地域は県立自然公園第2種特別地域に指定されており、いくつかの規制がある。今回の展示に際しても自然公園における広告掲示物を対象とした規制が適用され、作品の大きさ、素材、色彩等が制限された。出品作家にとっては厳しい条件の中での制作となったが、それ故にこのような場で美術展を開催するノウハウや可能性を示すことができたと思う。

展示作家は10人と1グループである。木下と河村はこの森の素材を使い制作した。木下は伐採された木を削り出して地面に打ち込んだ。河村は集めたツルをかご状に編み木に寄生するようにぶら下げた。山本は立木に縄を巻いて繋ぎ、その関係を意識させる。岸は木と木の間に鉄のバーを弓なりに渡しその間に発生する力学的な状況を視覚化する。丹羽は起伏する丘陵にロープを直線に張りその地形を顕在化する。塚本は木にとまる蝶を拡大し、竹と紙によりグリッド状に抽象化する。樂土舎グループはさびた針金で空間に落書きするようにかすかに見える小さな小屋を点在させる。中村は駿河湾から打ち上げられたように3隻の赤い船を樹上に吊るし、東北の震災

の記憶をよみがえらせる。井上はこのパークウェイが暴走族のたまり場であることを意識し、暴走族の落書きをコピーした看板を掲げ、音声によるバイクの擬音をCDから流す。著者は森の風や人の動きを音に変換する作品を会場10箇所に点在させた。このようにこの会場は、その環境の中から引き出された要素で成り立った作品群で構成された。

期間中2つのワークショップが実施された。ひとつは出品作家のゴンザレス氏を講師とし中部農林事務所が主催、NPO法人しずおか環境教育研究会が企画した森の木を使って子供たちが造形作品を作りそれを森に展示するというものである。当初別々に企画されていたものであるが共通する部分が多く共同開催ということでもとまり、アートと自然教育の共存という理想的な結果となった。もうひとつのワークショップは、「使われなくなった傘を再利用するプロジェクト」を全国展開しているCASA PROJECTを招待したものである。これは、エコロジーの思想に触れながら展覧会を楽しんでもらおうという企画からである。最後の2日間だけではあったが、傘の布が広がった会場は、和やかにくつろぐ家族連れの明るい雰囲気で溢れていた。

夏池 篤



静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森（ゆうきのもり）



井上明彦 INOUE, Akihiko

1984年京都大学大学院博士課程中退。2006-07年文化庁新進芸術家在外研修(パリ)。近年の主な展覧会に「生存のエシックス」(京都国立近代美術館、2010)、「反重力」(豊田市美術館、2013)、「ふたしかな屋根」(ギャ러리・サンク、奈良、2013)等。美術を通して人間と自然、秩序と無秩序の境界に触れることに関心がある。近年は特に屋根をテーマに、絵画や立体、インスタレーション等に取り組んでいる。



瞬間移動：静岡2014
パネルにアクリル、音声、CDプレイヤー
123 cm×300 cm (×2点)

『瞬間移動』とは、ある暴走族のグループ名です。彼らは、空き地のブロック塀に自分たちの名前を落書きします。日本平パークウェイには、暴走族が多いと聞きました。遊木の森を取り囲む日本平パークウェイには、事実、暴走する自動車事故の犠牲者の慰霊のためにつくられた不思議な歩道橋がかかっています。

遊木の森の北と南の出入口付近に、ブロック塀を模した『瞬間移動』のパネルをたてました。パネルからは、暴走族の爆音を口でまねた音が聞こえます。ときに本物の暴走車の音とシンクロします。中央では、一瞬でどこへでも行ける『瞬間移動切符』売り場を設けました。価格は自己決定制です。うれしかったのは、予想を超える売上げがあったことです。

最終日、二つのパネルのあいだを、爆音を立てながら瞬間移動を試みました。風景がちがって見えました。

人類はどこへ行くのでしょうか。



INOUE Akihiko, "Teleportation: Shizuoka 2014", work
井上明彦《瞬間移動：静岡2014》、作品 4'20"



INOUE Akihiko, "Teleportation: Shizuoka 2014", performance
井上明彦《瞬間移動：静岡2014》、パフォーマンス 2'11"



静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森（ゆうきのもり）



河村 洋子 KAWAMURA, Yoko

1985年生まれ。
静岡文化芸術大学デザイン学部空間造形学科卒業。
その後、京都造形芸術大学大学院芸術表現専攻を修了。（総合造形専攻）
詩人、音楽家とのコラボレーション展示、コンサート舞台の演出などを行
い、現在は中田島砂丘（浜松市）にて定期的な公開制作を行っている。



宿り
枝、蔓、葉
70 cm×70 cm×200 cm

遊木の森の中で作品がどのように生かされるか。森の中で作品が異物感をもつことなく存在できる様目指しました。しかしあまりに同化してしまうと作品であることが気付いてもらえなくなってしまうため、その良い加減を試みました。家や家族をテーマに人を包み込むような作品を造りたいと考えています。今回この遊木の森には既に包み込まれる感覚がありました。そのためその中に「宿」らせてもらう、お邪魔させてもらうといった意味で「宿り」という作品を制作しました。また屋外という場所により季節や時間の経過をより感じられるため、それを活かせる様試みました。葉の落ちる季節、作品がそれによって時間の経過が与えられより馴染む。最終的に作品は朽ちて森に戻っていく様な形を目指しました。



静岡アートドキュメント 2014

B 遊木の森 (ゆうきのもり)



岸 美智代 KISHI, Michiyo

1984年 静岡県函南町生まれ。
常葉学園大学卒業、愛知県立芸術大学大学院修了。
インスタレーションを主に板ガラスと他素材を構成した作品
を発表してきた。最近では、円弧をイメージした作品を制作
 している。愛知県在住。



Circle of earth
鉄、ビーズ
H300 cm×W350 cm×D360 cm



私は瞬間を認識するために作品を作っている。特に光のきらめき、風の揺れ、張り詰めた空気といった、見逃しがちな些細な事である。その中に私は心地よい普遍性を感じている。

今回、4本の木と木の間に2つのラインを描いた。鉄の円弧は大地を、透明なガラスのラインは水平線をイメージしている。ラインのクロスや対比から、天地の感覚を曖昧にしようと試みた。そうしてイメージを広げることによって、空間と対峙し、無限の瞬間を垣間見ることが様々な角度から摸索している。

静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森 (ゆうきのもり)



木下 琢 朗 KISHITA, Takuro

1977年生まれ。東北芸術工科大学美術科彫刻コース卒業後、
富山県井波伝統彫刻を修行する。
2005富嶽ビエンナーレ入選。
2007アートカゲヤマ画廊、2012春野山の村アトリエF で個展。
2014ギャラリー Yellow Passion



地点 もののはじまり
木
直径約30 cm×高さ約70 cm×10本

展示会場となった遊木の森はかつて開拓された農地でした。現在は自然探勝路として人々に利用され、森林環境教育の場として活用されてます。野外展示するためにその場所の記憶と対峙する必要性を感じ、遊木の森を何度か訪れながらここに在るべきものは何かを考えました。そして、展示一年前に遊木の森で除伐された木々を材料にして tee peg (ティペグ) を制作しました。ティペグはゴルフのティショットに使うボールを乗せる台座のことで、Teeの語源はケルト語で house (家) を意味し、スコットランド古語では「もののはじまり」を意味します。

木は二度生きるといいます。樹を切り木材となり人々の生活の中で生かされ続けて行く命があります。その場所に息衝いた木々を再び大地に挿し込み、森と繋がる地点のはじまりとして展示しました。そのものはいずれ自然と朽ち果て大地に還り命を宿す土となることでしょう。土地の土壌の安定を願い自然と人とを結ぶ場所として繋がりを示した作品です。



静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森（ゆうきのもり）



ゴンザレス・ウィルフリド
GONZALES, Wilfrido

1959年生まれ。フィリピン大学美術学部彫刻科卒業。油絵とモノタイプ、針金の作品の制作。結婚生活の為1990年来日。静岡、東京、大阪、名古屋で作品展。1985年からラタン(藤)を作品の素材として選んで(天然素材は暖かい)、テーマ「人間」に会う。ラタンは骨組みでもあり、それと同時に既に作品として成り立っており、それ以上何かを付け加える必要がありません。つまり、ラタンで作られた「線」を使って、立体の絵を描いているのです。



かくれんぼ
ラタン、銅線
各175 cm×150 cm×100 cm

ワークショップ:アトリエ「遊木の森」へようこそ
NPO法人しずおか環境教育研究会、静岡県中部農林事務所との共同事業

「人は森の中にどんな物を残せばよい？」
子供達(小・中学生)に対して、森はどう守ればよい、どう使えばよい。そして森に対して、子供が楽しめて、行きやすい所に思えるように。子供達(小・中学生)の力を借りて、森の中の物を拾って、その物を作品作りに。作る時には自然なものしか使わず、作品と一緒に作って、最後に森の中に設置する。
1ヶ月毎に設置した場所に行き、変化を感じる、等を確認して、写真を撮ります。



ワークショップ



静岡アートドキュメント 2014



遊木の森（ゆうきのもり）



塚本南波 TSUKAMOTO, Minami

1983年静岡県島田市に生まれる。
2006年常葉学園大学造形学部造形学科卒業。
2012年愛知県立芸術大学大学院美術研究科彫刻領域修了。

所在なげにぽつんと存在する彫刻をつくりたいです。
一握りの綿と、一枚の鉄板を、同じ密度で感じることができるから、彫刻っておもしろいなと思います。



自然の羽根
竹、和紙、柿渋、糊
サイズ可変

遊木の森へ足を踏み入れたとき、懐かしい気持ちになりました。特に作品を設置した谷戸部は風が穏やかで昼間は日差しが暖かく差し込んで、昔の人々はこういった場所を選んで生活を営んでいたのだろうと、感じました。大切に守られているこの場所で、どんな作品を作ろうかなと考え、なるべく自然の素材を使って、自然の中へ溶け込めるものにしようと思いました。

和紙と竹を使い、谷間を吹き抜ける静かな風に少し揺れたり、陽ざしを浴びて影を変えたり、雨に打たれて透き通ったりする形をつくりました。静岡市の山の奥の、秘密の花園のような自然が、これからも私達に懐かしい場所を思い出させてくれる場所であればいいなと思います。

静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森（ゆうきのもり）



中村 昌司 NAKAMURA, Masashi

1953年生まれ 東京藝術大学美術学部油画専攻卒業。
静岡帰郷後小池一誠と出会う。高校美術教師をしながら、
御前崎海岸で流木を拾い続け、東京、京都、山梨、静岡にて
個展やグループ展に作品を発表してきた。
東日本大震災と福島第1原発事故から赤色を使用。現在、
跛者について考えている。掛川市在住。

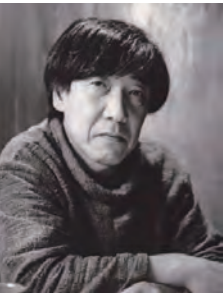


貴船は、駿河湾を航く
遊木の森の樹木、綿ロープ、布、塩ビパイプ、クリアファイル、ピアノ線他
貴船1(500cm×75cm×60cm)、貴船2(430cm×60cm×50cm)、貴船3(370cm×50cm×40cm)

2011年3月11日 金曜日14時46分、そこで何かが変わった。変わらなければならないが、変わったことを見ないようにしている者たちがいる。「頑張れ」「絆」「つながり」「花は咲く」言葉が、美しく軽い。
冷たい雨に打たれ、背丈以上の熊笹の中を毒虫に刺されながら獣のように這いずり回りロープを張った。三つの貴船を吊るすのに3日かかった。私はかつて山登りをよくした。登山は登頂の喜びよりも重たい荷物を背負い、山を登っていく苦しさに快感がある。大して過酷な自然ではないが、その自然と格闘しているという自己満足がある。樹林の中を、岩山を黙々と登っていく。表現は、この登山に似ているところがある。登頂の喜びを伴わない苦い労働である。今回は、冷たい風雨に打たれ、濡れた顔に流れる雨の雫が心地良くもあった。顔から耳、手まで露出しているところは毒虫に何箇所も刺された。「なめていたな」と思った。なぜこんなに苦勞して表現しなければならないのかと思うこともあるが、作業をしている自分に満足している。子供が、森に放たれた時、嬉々としてそこで多くの遊びを発見し、夢中で遊んでいる自分がいた。管理された「遊木の森」で遊ばされた。
展示には、丹羽氏ご夫婦や常葉大学の学生、旧友であるが、高校の校長の加藤氏、「NPO法人しずおか環境教育研究会」理事長の大畑氏にお手伝いをして頂いた。今回のイベントも夏池氏には、面倒をお掛けした。その他、常葉の大学生が色々やってくれた。私の展示は、いつも誰かがお手伝いをしてくれないと出来ない。そして多くの作家と作品との出会いなど今回のイベントも多くの収穫があった。企画、運営をして頂いた方々に感謝申し上げる。



静岡アートドキュメント 2014 **B** 遊木の森 (ゆうきのもり)



夏池 篤 NATSUIKE, Atsushi

1954年生まれ。愛知県立芸術大学大学院(彫刻専攻)。在学時から木を素材にした立体作品を手掛ける。1986年チェルノブイリ原発の爆発以後、木に溶融する金属(アルミ)を流し込む作品を制作。2000年代に入ってからはメディア機器を取り込んだ立体作品の可能性を研究。近年、環境や社会状況を強く意識した作品に取り組んでいる。今回は「遊木の森」での展示で、森の中を流れる空気を音や形に変換した作品を考えている。島田市在住。



森の呼吸
竹、プラスチック紙、ロープ、塩ビパイプ、ウォータージャグ
約300 cm×300 cm×100 cm 会場10箇所に点在

初めてここを訪れ森の中を散策した時、木々のざわめきと小鳥の鳴き声、そこに流れる風の音が自然と体の中に入ってきた。心地よい気分になっていると、途端にパークウェイを疾走するバイクの爆音が飛び込んでくる。視覚より聴覚の情報に敏感になる森である。作品はこの森を吹き抜ける風を音に変換することを試みたもので、そこにある木の配置を生かしてロープを掛けるだけの設置とした。風に加え鑑賞者もロープを引くことで音を出すことができる。それぞれの作品はすべて音程が異なり、風と人による偶然の即興演奏を楽しむことができる。



<https://youtu.be/Jo6iocVP55U>

静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森（ゆうきのもり）



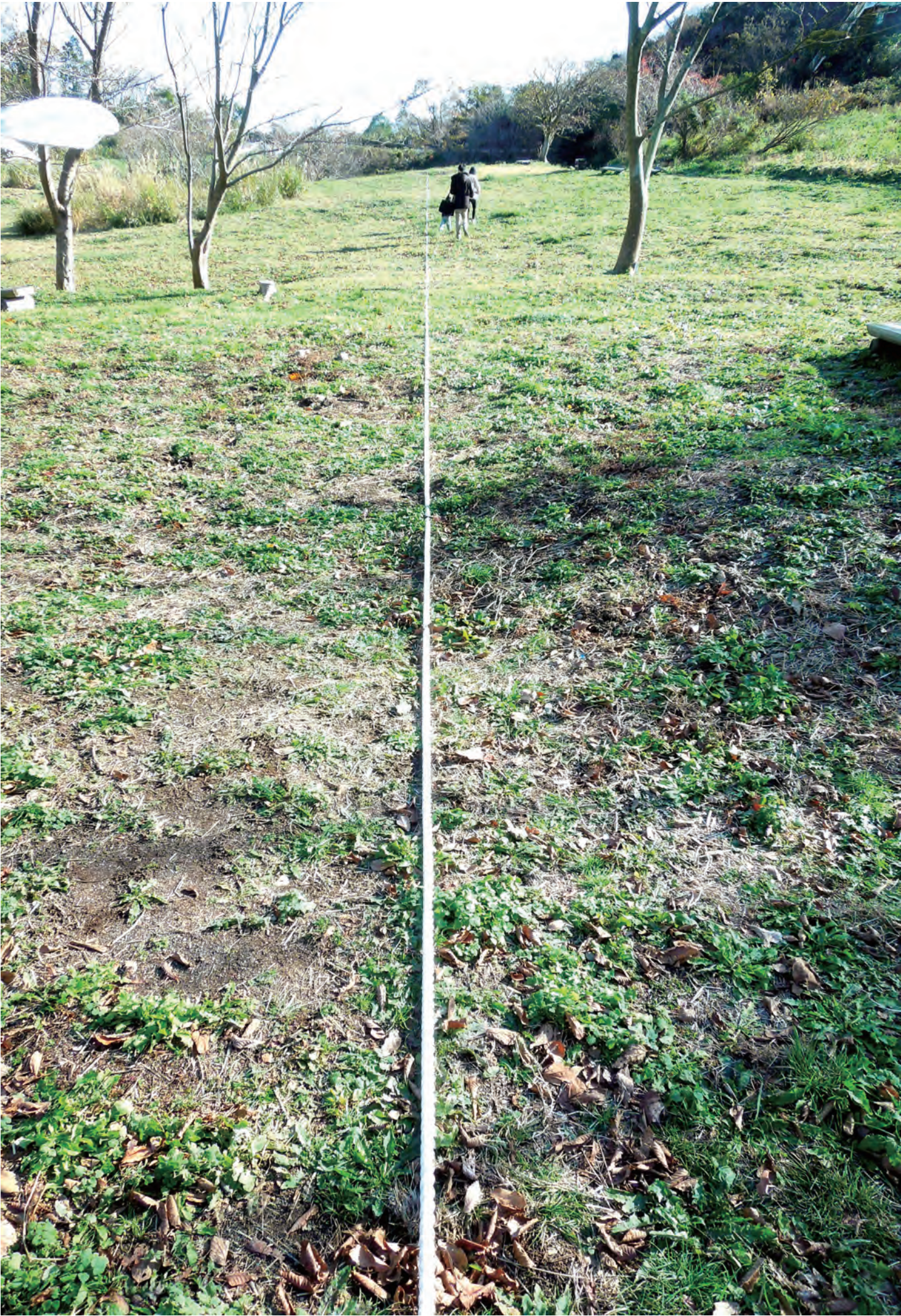
丹羽 勝次 NIWA, Katsuji

1931年生まれ。静岡大学卒業。
中央公募団体展の在り方に疑問を抱き、10年続けた新制作協会展の出品をやめる。1966年「グループ幻触」の結成に参加し、切り抜きによる[箱]のシリーズを制作。1967年シェル美術展入賞。1970年代「複数による複数展」。1990年代以降「on and off」、「道」のシリーズと併行して野外展においてインスタレーションを多くする。2014年「グループ幻触」と石子順造展（静岡県立美術館）。



まっすぐな線のある景色
20 mmロープ×70 m
unlimited

遊木の森は、南北に長くゆるやかに起伏している。
南に向かう空の下に、駿河の海がある。
振り向いて北の空に目をやると、南アルプスの連座が木々の間に見える。
『まっすぐな線のある景色』は、70 mの白いロープを森のゆるやかな起伏に合わせ、南北にまっすぐ、ただ置くだけである。



静岡アートドキュメント 2014 B 遊木の森 (ゆうきのもり)



山 本 晴 康 YAMAMOTO, Haruyasu

1955年生。東北大学経済学部卒業、静岡大学大学院教育学研究科(美術教育専修)修了。作品の向こう側に在る精神世界を、作品とそれが置かれる空間、それを見るものとの関係を基に制作している。最近では「閼(いき)」というテーマで、室内外のインスタレーションとしての展開を試みている。日本国際美術展(1986)を始め、A-Value展などの県内外の多くのグループ展に出品。東京、ニューヨーク、静岡、沼津、藤枝などで個展。



閼(いき)
荒縄・角材と設置場所の状態を含む
日本平側駐車場前のスペース500 cm×2000 cm(左側) あずまや西側のスペース1000 cm×3000 cm(右側)

角材に巻きつけられた荒縄はその場所に侵入し、地面を這い、樹木の幹や枝に巻き付きながら、自然の秩序そのままに柔らかく空間を再構成していきます。そして、そのことによって、再構成された空間の中でその場所にあるものそれぞれを関係付けていきます。角材は、自然に対する作者の控えめな意思の表明であり、また空間の再構成のための結節点の役割を果たしています。

「閼(いき)」とは域 areaを表す概念ではありません。境 borderを表す概念です。こちらとあちら、内と外との境界を意味しています。見る者は荒縄によって内と外に導かれ、それぞれの空間を感じることができます。



楽土舎・楽土の森プロジェクト

RAKUDO・SHA, Rakudo no Mori Project

袋井市豊沢に1996年楽土舎創設。「新たな創造空間の構築」をコンセプトに、人と自然とアートの関わり方を、また現代社会の営みの中で、根源的なものごとの成り立ちを考察する。楽土の森プロジェクトでは農、建築、美術、音楽、身体表現などが有機的に結びつくことで独自の空間を創出。これまでのプロジェクトで建設された建築や舞台装置は、オブジェとして残すと同時に解体・再生を繰り返している。
(代表者＝マツダ・イチロウ) <http://www.rakudosh.com/>



内なる外 外なる内
鉄線、石

生命体とは構成する要素とそれを取り囲んでいる要素の密接な距離感や関係の中で存在するのであって、決して単独で存在するのではない。「楽土の森」を生命体として置き換えてみましょう。ここで制作された建築やオブジェ、あるいはパフォーマンスのたびに制作された舞台は、軌跡となって積み重ねられ、時間の経過や記憶とともに重厚に塗り重ねられます。同時に、多分野にわたる表現者やそれらを支える制作スタッフ、勿論観客までもが「楽土の森」を構成する要素となって密接に関わっております。このような関係として存在する境界部分や見え方そのものが、アートとしての可能性を秘めているのではないかと思います。

本作品は、置かれた空間に溶け込むと同時に、いったん構築物として認識したときの視覚は鉄線をボーダーラインとして空間を切り取るというように、モノの存在もまた身体性に直結していることを表しています。また、作品は脆弱な鉄線と最低限の結わりをすることで構築物としてギリギリの状態を保っています。これらはこの危うい現実を物語ると同時に、それぞれが支えあうことで成り立つ生命体としての「楽土の森」そのものを表現しております。



白井 嘉尚
蜂谷 充志

静岡大学ビオトープ ●●

◎静岡大学ビオトープという「場」

静岡大学ビオトープは、日本にビオトープの概念と具体事例を広めた、故杉山恵一先生による学校ビオトープの原型である。人の手で「造成」されることで、駐車場や焼却炉であった場所が、豊かな生態系を育む自然環境に復元された。そんな杉山先生は詩や小説を書き、また絵筆をふるって旺盛な制作活動を展開された芸術家でもあった。

ところで「ビオトープ (BIOTOPS)」とは、「生命の場所」を意味するドイツ語である。現代美術の文脈に於いても1980年代頃から、自然環境や環境問題に芸術家としてアプローチする動向が現れた。

このビオトープは、静岡大学の敷地の外れ、狭いながらも公道をはさんだ飛び地のような場所である。そこは金網に囲まれ、金属製の門扉によって守られながらも、木立と草むらと池、そして丸太小屋があるばかり。杉山先生が退職されすでに10余年の歳月が流れていたが、そこに存在する草木・水・朽ちかけた丸太小屋は、めぐる季節と時の流れのまま、復元された生態系を謳歌しているように見えた。

杉山先生の詩いた「種」、生態学的に望ましい環境を形成するそれらアイテムたちは、鳥や昆虫、その他小動物が生息する場所を形成し、金網の外にあふれんばかりの生命力を見せていた。私は、そこに神秘を感じていたように思う。

◎ビオトープが結ぶ縁

「場」には縁が備わり、思いもかけぬ出会いをもたらすことがある。

このビオトープを、静岡アートドキュメント2014の会場として利用できたのは、同展の実行委員で杉山先生とも親交のあった、静岡大学の白井嘉尚氏の発案からであった。同大学の教員であっても、施設管理上、目的外の使用にはハードルがあったように思う。その上で白井氏は関係者に展覧会の趣旨を丁寧に説明することで、ハードルを一つずつ越えていったようだ。とりわけ、杉山先生を引き継ぎ、ビオトープを管理されている静岡大学の新妻廣美氏の理解と協力がなければ本企画の実現は不可能であった。また会場にて、杉山先生の奥様より「主人はきっと喜んでいます」と言葉をかけていただいたことも望外の喜びであった。

コントラバス奏者の土田卓氏も、ビオトープに引き寄せられた芸術家の一人である。小さな池を隔て、木立をステージとした土田氏の演奏は、通常の演奏会とは異なり、木漏れ日や、やわらかな風、そして生命の気配など場と深く交流することで、そこに至福のひとつときが生み出されたことも大きな成果といえよう。

蜂谷 充志



「topos —場—」 RELATIONAL EVENTS

フィールドライブ

12月6日(土) 午前の部 11:00～／午後の部 14:00～
コントラバス：土田 卓（シンフォニエッタ静岡団員）
演奏曲：H. フリーバ：古典風組曲
G. テレマン：アンダンテ
G. ヘンデル：オンブラマイフ

スペシャルトーク

12月6日(土) 午前の部 10:30～／午後の部13:30～
「日本最初の学校ビオトープ誕生(秘話)」
講演／ビオトープ管理運営協力：新妻 廣美（静岡大学職員）



静岡アートドキュメント 2014 静岡大学ビオトープ



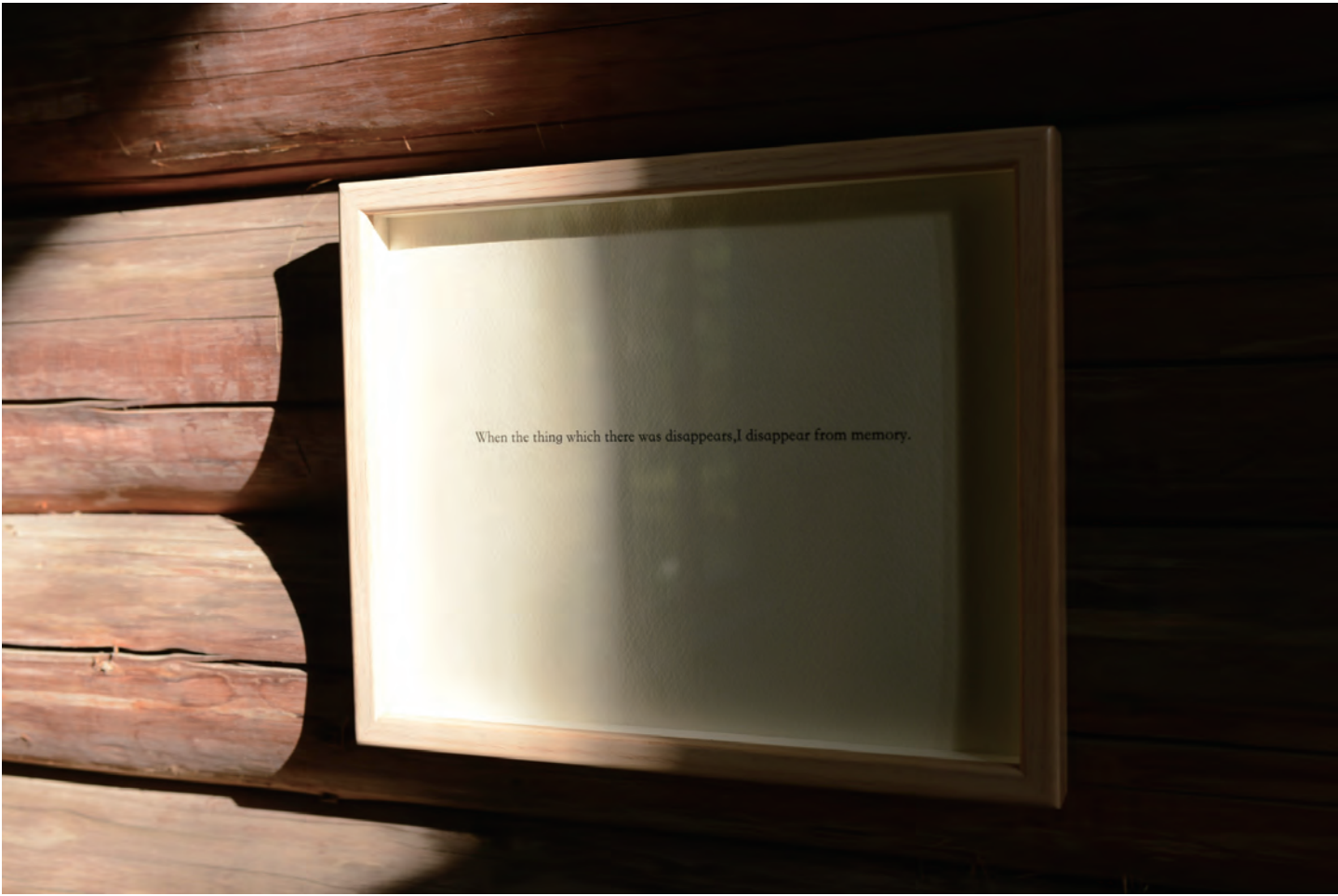
蜂谷 充志 HACHIYA, Mitsushi

長野県に生まれる。
1980年代、新表現主義の波をかぶるところから表現活動が始まる。
物質にこだわる美術のよろさを痛感し、1996年以降はフィールドインストールを中心に展開して行く。「目の前にないものは記憶からなくなる」という概念設定のもと、制度に束縛されない表現の場を確保し、社会空間に提示する一連のプロセスを作品として表現活動をしている。



View 2014 - Biotops-
静岡大学ビオトープ、木、綿糸、木の実、ラムダプリント
静岡大学ビオトープ内

確実性の中には残部が存在し、その曖昧で取り残された残部を私はアートとして捉え、生活空間に関連付けた痕跡として、私は20年間作品を制作してきた。深く暗い森の中で、柵が巡らされ、それに導かれ進み歩くと、丸太小屋があり、その扉を開けようとする。神秘と不安が降り注ぐ未知の世界を感知する感覚は、不確実性の力であり、残部の力である。
2011年のカタストロフィ(catastrophe)は、漠然と認識していた視点の先の問題を、私に突きつけた。それは、自然と文化の関係性であり、現代社会という生活空間の中で呼吸する私の不安定な存在が見えたことだ。内側から見る柵と外側から見る柵、正の方向とそれに逆らう負の力、真実と虚構、物質と精神、生きるということと死ぬということ、その曖昧な部分さえ、残る余地を与えられなかったうえで、残った私の存在。それでも、新たな柵を開け進むことができる。そこで見たものが目の前から無くなる時、記憶からも無くなる。



アートゲルトナリンネン

乾 久子
＋
福島 世津子

中村 妙

大谷の古民家・大村邸 ●●

古民家大村邸は、大きな梁や柱、囲炉裡、引き出し階段など昔の家にあったものがそのままの形で残されている伝統的日本人家屋である。ここ大谷の地に移築されたのは明治18年(西暦1885年)、今から130年前のことだ。

大村邸は、江戸時代から藤枝にあった古い日本家屋を解体し、梁や大黒柱をはじめとする多くの部材を用宗港経由で大谷の地に運び再建築されたという。移築前の家の歴史は定かではないが、藤枝のその家は五代前の大村家の当主の妻の実家であるらしい。その家が何を家業としていたか、その家自体が当時築何年であったかなどはわかっていない。いずれにせよ、移築後130年と移築前数十年の和が古民家大村邸の『年齢』ということになる。増築したり建具を変えたり何度かのリノベーションを経て現在の姿となったようだ。日本家屋の伝統工法は釘を使わないので、解体と再建築が可能であり、当時としては特別なことではなかったのかもしれないが、やはり家ごと藤枝から運んだというストーリーは壮大だ。大谷での大村家は地主であり三代前の当主は村長をつとめていたと聞く。

大村邸には母屋のほかに蔵もある。この蔵の部材も明治18年に運ばれ再建築されたが、それは現存の蔵の約三分の一で、こちらも母屋同様年代を経ながら現在のかたちに至っている。

なべて古民家というものは新築家屋の対極にある。まっさらなものは初めから何一つなく時間の経過とともに増やしたり繋いだりしてじわじわと出来上がって行くもののようでその始まりは判然としないものが多いらしい。家そのものが複雑に絡み合った古い記憶を所有する存在なのだ。静岡アートドキュメ

ントは、静岡・大谷の地に古くから存在し固有の記憶と時間を持つ古民家という空間と現代美術とを出会わせ、新しい物語りを芽吹かせるべく、前回に引き続き、会場にお借りした。家主の大村方子氏は、現在は東京在住だが、この大谷のお宅とのあいだを繋ぐ行きかい保護につとめている。

今回は、母屋の和室に中村妙の平面作品が、先に触れた蔵、すなわち離れとも言うべき煉瓦作りの空間(2000年代初めに一部改築、カフェのようなしつらえの空間と大村氏のコレクションが所狭しと展示されている屋根裏付きスペースとがある)には、ユニット・アートゲルトナリンネン(福島世津子+乾久子)のインスタレーション作品が展示された。中村は続き間の和室に大判のドローイング作品を平置きし空間との静かな調和をはかった。アートゲルトナリンネンは20センチ四方の箱数十個のインスタレーションによって閉じた洋の空間を生かした。

訪れた人たちは、古民家の古いたたずまいにまずは小さな驚きを持って触れる。知ってはいるけれど、自分の現実の生活には存在しない古びた空間に身を置くことで自分の内側にある何かが呼び覚まされるのか。ある種の「身に覚え」、ある種の「なつかしさ」とともにその広く深い空間に目を向け、やがて作品鑑賞へと向かっていった。いうまでもなく、古民家の持つ記憶という時間軸は、作品展示には圧倒的な影響があった。作家はそれを鑑みて制作と展示を行ったはずだ。キーワードは時間と記憶。そして鑑賞者は、この、時間を伴う空間の中でこそ広がった作品世界を楽しんだに違いない。

乾 久子



写真／
左上：母屋外観
左下：母屋和室
右上：カフェ外観
右下：カフェ内部

管理運営協力：
大村 方子



アートゲルトナリンネン(乾久子＋福島世津子)

Artgaertnarinnen (INUI, Hisako + FUKUSHIMA, Setsuko)

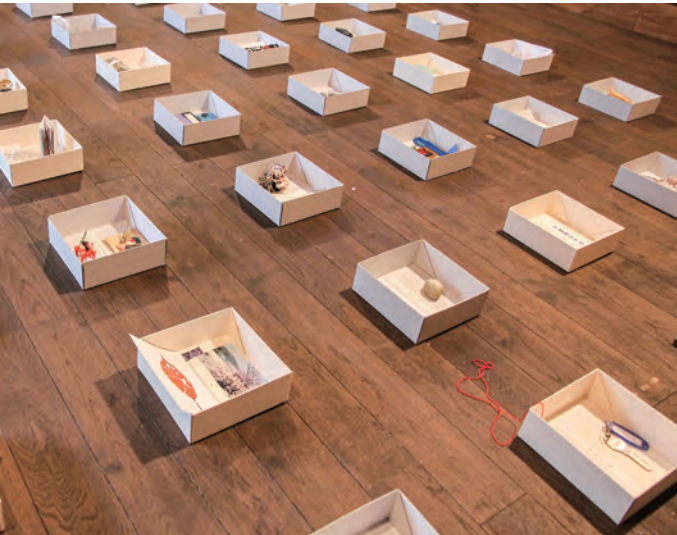
2005年ユニット結成。対話をテーマにした作品を東京、ドイツ、静岡で発表してきた。アートゲルトナリンネンとは、ドイツ語で女芸術庭師達といった意味の造語で、庭師のように植物の生育を見守り助けアートという種を蒔きたいという思いがこめられている。『10万年の始まり』は、3.11以後の日常を写真と往復書簡で緻密に綴ったもので、今回作品はその往復書簡の続きと新作オブジェのインスタレーション。乾は浜松、福島はドイツ在住。



十万年の始まり：対話
ミクストメディア
室内インス タレーション 約400 cm×700 cm

Artgärtnerinnen（アートゲルトナリンネン）という命名は、Art＝美術、そしてドイツ語の Gärtnerinnenn＝女庭師達という言葉から作られた造語です。庭師とは、庭を造る人、種を蒔き、植物の生育を見守り助け、手入れをする人のこと、私達はアートと言う種を蒔きたいという思いからこのユニットを立ち上げました。

このインスタレーションは『10万年の始まり：対話』と言うテーマの下に制作されたものです。原発から生まれる放射性廃棄物の放射性レベルが生物にとって無害になるまでの10万年。その途方も無い時間を想像した時、私達は無防備なまま放り出された心もとなさを(強く)感じました。アートゲルトナリンネンはこの気の遠くなる 時間の流れの中で、少しでも多くアートの種を蒔きつづけたいと思っています。



静岡アートドキュメント 2014 **D**大谷の古民家（おおやのこみんか）



中村 妙 NAKAMURA, Tae

1984年 青森県生まれ。
静岡大学大学院修了。
在学時より、植物や水、光、影など、記憶に残った自然の色や形を
もとに、色鉛筆を使ったドローイングや立体の制作が続けている。
香川県在住。



紙の上の呼吸
紙、色鉛筆
113 cm×113 cm (作品2点)

「紙の上の呼吸」はイメージや記憶をもとに描くというシリーズのドローイング作品である。
花びらをモチーフとしている。ある時、一枚の花びらに注目すると、それ自体が今にも動き出しそうな
躍動感のある生き物に思えた。古民家に沢山の花びらが集まったとき、それぞれの呼吸が重なり合い、
新しい調和がうまれる予感がした。



白井 嘉尚
奈木 和彦
松浦 延年



萬象寺 ●●●

静岡アートドキュメントは、「場所の特性」を生かしたサイトスペシフィックな美術展を志向している。さてここでは、有度山東麓にあつて富士山の眺め抜群の臨済宗寺院、萬象寺会場について報告したい。そもそも寺院や神社は靈的なパワースポットであつて、建物、敷地、周囲の環境・景観もふくめ特別な空間である。そして近年は美術展や音楽会の「サイト」としても注目されつつある。特有の色彩・イメージ・音・匂いも相まって、感覚や記憶をゆさぶる場でもある。

萬象寺、若色住職の好意により、私ども、三名（松浦延年、奈木和彦、白井嘉尚）は、本堂、位牌堂、和室、石庭を使う可能性を示していただいた。種々の可能性についてそれぞれ検討した結果、位牌堂のみを会場とさせていただくこととした。内部空間がシンプルであること、渡り廊下で本堂とつながっているものの独立した正面出入り口を持ち、本堂で法事が執り行われていても、美術展会場としての位牌堂は入場可能、ということが主な理由である。

ただ、松浦、奈木、白井は皆、平面作品をメインにしている作家であり、また位牌堂の構造からして、展示壁面としては二人の

作家で左右を分け合う形が望ましく、その場合は誰かが床に回らざるを得なかった。

もう一つの課題は、その空間を満たす色彩である。前年十月末に行つた下見の段階で、壁面上部、天井に接するように仏教の五色幕がめぐらされていることが分かつていたが、年が明けて五月末に再度下見に伺つたところ、その間に住職交代の儀式があつて、位牌堂は床一面、赤い毛氈の空間になっていた。壁面と床の配分については、八月に入り、奈木和彦が、床の使用に積極的な意義を見出す作品を着想することで解決した。極彩色の幕そして毛氈と、作品との関係については、各作家がそれぞれに興味深い対話をくり広げたように思う。

いずれにしても、作家側として留意したのは、寺院そして位牌堂の敬意とご住職への謝意である。サイトスペシフィックという意味で、萬象寺という会場を得たことで、静岡アートドキュメント2014に幾ばくかの広がりがもたらされたとしたら幸いである。

白井 嘉尚

Photo: Endo, Yukihiro



静岡アートドキュメント2014 C静岡大学ビオトープ E萬象寺（まんぞうじ）



白井 嘉尚 SHIRAI, Yoshihisa

1953年生まれ。東京藝術大学卒業・修了。
絵を描くために絵を捨てる。1979年から89年にかけて、「鏡のフロッタージュ」「フリー・ジグソーパズル」シリーズ。1990年から現在まで、絵具の染み・滲みのなかで遊泳。「版によるドローイング」と「森のなかの花」シリーズ。企画者としてはA-Value展創設に参加。「和の紙・韓の紙」展プロデュース。「めぐるリアート静岡」企画に参画。静岡大学で絵画分野を担当。



森のなかの花 静岡大学ビオトープ／Photo: Shirai, Yoshihisa 右: 萬象寺／Photo: Endo, Yukihiro
和紙に水彩、パステル、オイルパステル、油彩
56 cm×76 cm

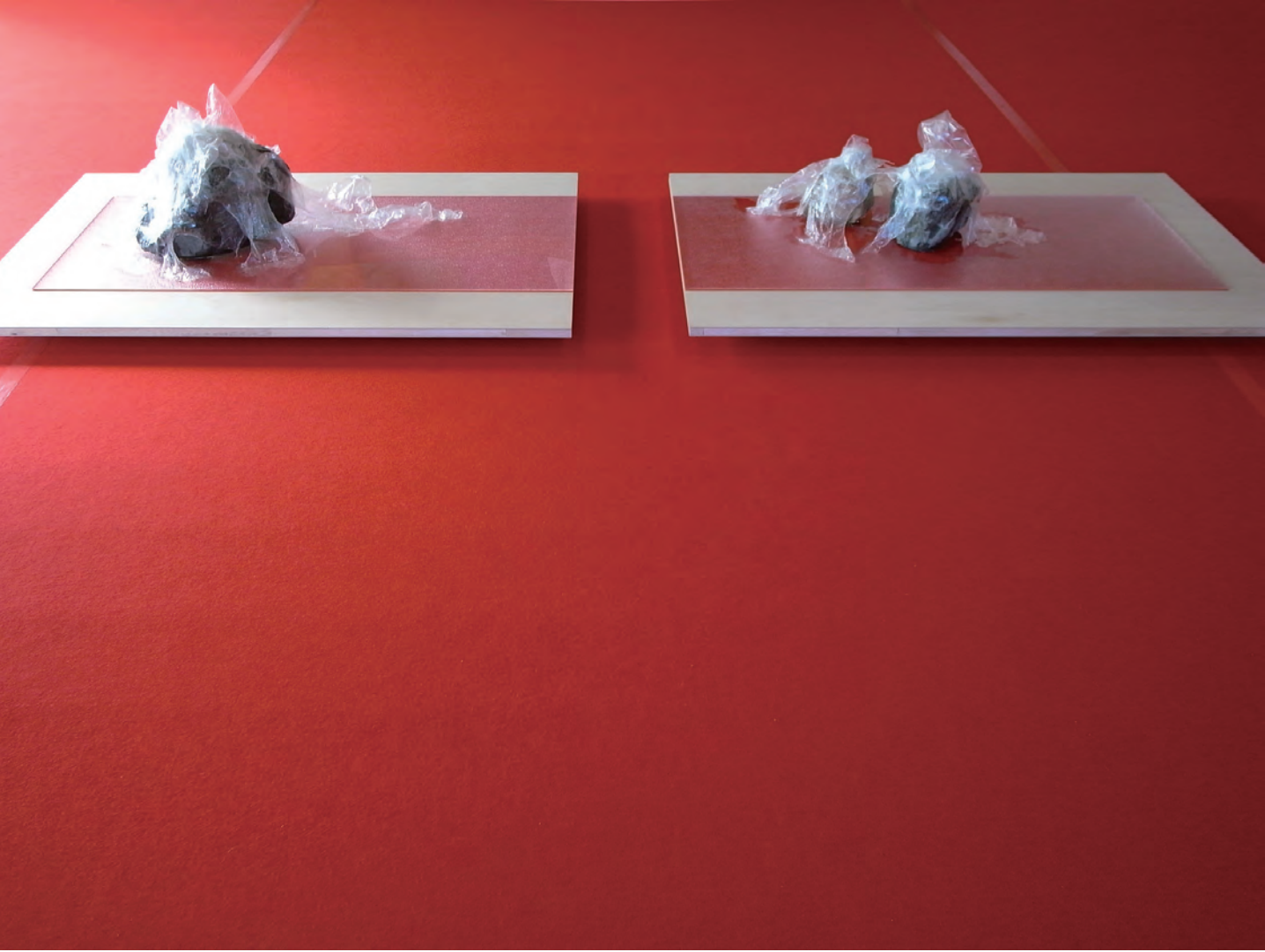
二会場に作品を展示した。臨済宗の萬象寺と、静岡大学ビオトープの丸太小屋である。いずれも、2001年から始まったドローイング「森のなかの花」で臨んだ。このシリーズは、これまで様々な場所で発表してきたが、ここ数年は画廊以外での展示が増えてきた。廃校となった中学校、百年前の蔵、古い社員寮を改造した展示スペース等々。
制作にあたって私は、場との関係性よりも作品そのもの、そのヴィジュアルリティに傾斜する。それでも、作品が置かれる場について無関心ではられない。仏教寺院と響きあうドローイングについて、あるいはビオトープの朽ちかけた丸太小屋との相乗効果について想いをめぐらす。
「森のなかの花」、「森」をつつむ光と闇、「色」が「空」であり、それゆえ限らない多様性に開かれている。
越前和紙を水に浸し、カラーインクを垂らす。そこに生じたカオス／コスモスに最小限の手を加える。「花」が見えるまで止めどない連鎖をたどる。





奈木和彦 NAGI, Kazuhiko

1970年 静岡県生まれ。
1996年 東京学芸大学芸術課程美術専攻絵画選修卒業。
在学時の1995年より制作／発表を開始。絵画を仕事の軸に据える傍ら、場における対峙のあり方として平面とは異なる媒体でのアプローチを試みている。近年はサテン生地を支持体に「花」を主題とした油彩画とマテリアルにオブラートをを使用したインスタレーションを手掛け、静岡、東京、BREMENなどで個展・グループ展を開催。藤枝市在住。



キカ #02
オブラート、油、水、境内の石、アクリル板、シナランバーコア
H60 cm×W320 cm×D90 cm

寺の山門をくぐり抜け、右手に雄大な冬富士を望むと枯山水庭園を挟んだ後方に位牌堂が鎮座する。今回展示に充てられたその場所は作品設置を拒むかのように床一面が赤い毛氈で覆われ、それを取り巻く壁面上部にも五色幕が掛けられていた。制作にあたっては、場の特性がもたらす張り詰めた空間に新たな何かを提示する方向性よりもむしろ、既にそこに有する時間や物に宿る存在感をはじめ、シンボリックな視覚的要素を抛り所とする表現形式を採択した。

見立ての手法を用い、位牌堂に架空の庭園を設えることで内と外との境界を曖昧にし、境内の枯山水越しに見える富士と相対する雪山の景色をそこに描き出した。オブラートは水により浸食されるが、その姿は油の介在を機に水の気配を微かに示しながら、その形を辛くも留める。刻々と絶え間なく変化する自然の摂理を具現化するにあたり、私は禅でいうところの観念的世界の創造、「見えざるものの中にそのものを見、聴こえざるものの中から、そのものを聴く」を念頭に臨んだ。





松浦 延年 MATSUURA, Nobutoshi

1949年静岡県生まれ。1980年代ロバート・ライマンの絵画に衝撃を受ける。精神的色彩である桜色の連作に入る。神田真木画廊での200号の作品「8月3日で終わる絵画」発表後、新たな抽象表現の可能性を追求。カネコアートTOKYOでの「マツウラRed」の個展を機に、液状の絵具を固める絵画シリーズが始まる。線もフォルムも消え絵画の領域を開拓しながら現在に至る。作品番号358まで進む。国内・国外での発表が続く。



No.279 White and Brown

oil on canvas
45 cm×25 cm

今回の第4回静岡アートドキュメントに出品したこの作品は、木製パネルに和紙を貼って（我がパートナー作）、その上から油絵具を流し込みながら描いた。何層かの絵具が乾いてほぼ安定するのに約二年を要した。単色シリーズと並行して、パネルの中に境目を作り異なる色を配した二色シリーズは比較的最近になって始めたものであるがなかなか興味深いところがある。この作品は長年私の絵画を構成してきたもっともベーシックな色調に基づいている。タイトルは「No.279 White and Brown」。だれも試みたことない独自の手法なので、未だトラブルの連続である。失敗が多くスリリングであるが、最後に美しく着地が決まった時は心地よい。その美しさに自ら驚く。そして次の新しい感動に挑む毎日である。



シンポジウム 「静岡アートドキュメント」―地域のなかで、地域をこえて―

11月29日(土) 17:00～19:00

SPAC - 静岡県舞台芸術センター 舞台芸術公園「カチカチ山」

静岡アートドキュメント2014開催初日のオープニングセレモニー終了後続けてシンポジウムを行った。参加者は40名ほど。参加作家の他に共催のSPAC- 静岡県舞台芸術センターのスタッフやボランティアの大学生、一般の方も少数ながら参加された。シンポジウムが行われた日本平中腹にある舞台芸術公園は、静岡県舞台芸術センター(通称SPAC)の占有施設で劇場や稽古場、宿泊施設などの演劇のための複合施設である。本企画展のメイン会場であり、その施設のひとつである食堂棟「カチカチ山」が会場となった。

4回目を迎える本企画展には30名の作家が参加した。シンポジウムにもほぼ全員が集まった。まず初めに参加回数を尋ねてみると初参加が2割ほどで、4回とも参加している作家が1割ほど見受けられた。全体で8割の作家が複数回参加していることになる。

『一地域のなかで、地域をこえて』という副題を背景に、なぜ野外で展示するのか、なぜグループ展なのかを中心に話題が展開していった。1950年代、60年代には既存の制度に疑問を投げかけるためにも野外での展示は有効だったが、現在では地域で行われる芸術祭などが一般化し、それ自体に批評性は乏しくなっている。ホワイトキューブから抜け出すことで、市民の目に触れやすくなるが、必ずしも展示しただけで見られることはなく、そこには何らかの工夫が必要だとの意見もでた。作品と観覧者の新たな関係性の構築や対話の必要性が求められているという指摘に頷く。

本企画展は作家が主催者となっているアーティストラン型の展覧会である。作家が希望の展示環境を創れるといったメリットはあるが、全体を展覧会として統一することには多く

の労力を費やさなくてはいけない。ただ日頃単独で制作に励む作家の情報交換や切磋琢磨の場としてグループ展は求められているという意見は少なくない。参加費や制作費は各自の支払いになるので、助成金の申請なども含め参加環境の改善が求められた。

静岡アートドキュメントを今開催することについて、過去の自主企画展(アートスペース、A-valueなど)とどう違うのか、他の企画展とどう違うのかという問いが提示された。

同時に静岡で制作することについて、改めて作家が生活する静岡とはどんな場所なのかという問いも投げかけられた。

2時間という時間があっという間に過ぎ、それぞれの問いを各自が実践で示していくということでひとまずシンポジウムは終了した。

柚木 康裕



舞台芸術公園作品紹介ツアー(SPAC 新作『変身』との共催ツアー)

12月6日(土) 13:30～15:00

SPAC - 静岡県舞台芸術センター舞台芸術公園

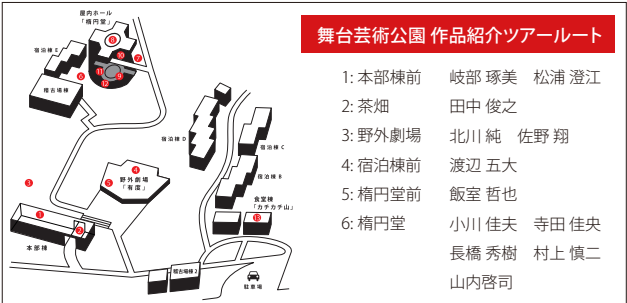
当日、SPAC新作「変身」鑑賞のツアーバスが運行された。約30人程の方々が浜松より芸術公園に到着。「変身」鑑賞前に芸術公園内に展示してある12名の作品を紹介する企画である。SPACの尾形麻悠子さん引率のもと作品紹介開始。

本部棟前、茶畑、野外劇場、宿泊棟前、楯円堂前、楯円堂の順に作品を紹介していく。参加者の皆様には作品のポイントを解説し、後は作品を自由に見ていただき質問に答えるように心掛けた。各作家の作品に対するアプローチの仕方に興味を持ち、今日的な問題提起にアートの力を感じたようだ。楯円堂に作品を発表した山内啓司氏には、御自身の作品についてのレクチャーをお願いした。

一作家あたり5分程度の作品紹介であったが充実した時

間を体感することができた。皆様のご協力に感謝。作品紹介終了後、参加者の皆様は予定通りSPAC新作「変身」の鑑賞ツアーバスに乗り込み静岡芸術劇場に向かった。

岐部 琢美



舞台芸術公園「楯円堂」 朗読パフォーマンス

11月29日(土) 15:00～(30分程度)

朗読：「写真のはじまり The beginning of a photograph」 ● 村上 慎二

朗読原稿裏話

展示プランを長橋氏から提示された時、楯円堂というデュオニユソスのと直観した空間の暗がりの中で、キャンバスの表面から発せられる光の空間に向かって空手道の形を演武する長橋氏を想像した。E・アジェの幾つかの作品と、W・ベンヤミンの論述も思い出された。写真は19世紀に生まれ、バルビゾン派、印象派と轍を近似とし、神学から詭弁を濾過する哲学より具体的にフォンテーヌブローの森を彷徨った。ギュスターヴ・ルグレイの例は言うまでもない。現在も、19世紀の絵画と写真が抱えていた相似の問題は継続している。描くという肉体を伴う所作と、言葉(朗読)という肉体から発せられる「息」を、山内氏の言及される「ビデオフィードバックの自然」が投影される場に配置することを仮想した。その「自然」とは、シテ島にある大聖堂の、壊れたステンドグラスから漏れる光が投影されることであらわれた床面の光景を、私の勝手なイメージとして仮定した。

以上のような内容が、長橋氏、山内氏との話し合いの中から導き出されてきた私の表現のツボであり、それらを原稿の源泉の一部とした。

さて、朗読のスタイルとしては、俳優やアナウンサーが感情を込めて読み上げる手法が挙げられるが、私は禅宗僧侶の読経、あるいは聖書朗読を手本とした。そもそも朗読内容が写真論なので、感情の込めようが無い。一応、参考・関連文献は以下の通り。

「明るい部屋」ロラン・バルト 花輪光訳 みすず書房／「複製技術時代の芸術」W・ベンヤミン 編集解説 佐々木基一 晶文社／「写真論」スーザン・ソントグ 近藤耕人訳 晶文社／「反解釈」S・ソントグ 高橋康也ほか訳 竹内書店新社／「アジェのバリ」TASCHEN／「写真の黎明」東京都写真美術館 1992／「カミとヒトの解剖学」養老孟司著 法蔵館／「新編 東洋的な見方」鈴木大拙著 上田閑照編 岩波文庫／「この人を見よ」ニーチェ著 手塚富雄訳 岩波文庫／「ツァラトゥストラはこう言った」ニーチェ著 氷上英廣訳 岩波文庫／「キリスト教の本質」フォイエルバッハ著 船山信一訳 岩波文庫／「演劇とは何か」鈴木忠志著 岩波新書／「聖書 新共同訳」日本聖書協会／「般若心経入門」ダライ・ラマ14世テンジン・ギャツォ 宮坂宥洪訳 春秋社

ここで朗読原稿の一部を紹介する。
『ソントグの写真論を踏まえた上で、写真は一枚ではなかなか捉えどころがないが、複数枚が提示されると、勝手にその関係性からストーリーが展開し始めることがある。新しい写真という更新が、まるで「後から来るものが先になる」ように、不明瞭な写真を導いていくことがある。枚数を見せることは、写真の意図性のある方向に位置付ける一つの方法であるし、バラバラの断片を適当に編集しても、妙なストーリーが勝手に生成されるものでもある。ストーリーは存外、見る側が用意するものである。乱雑に保存されたスマホのデータを渡り歩くことで、新しい虚構が生ずるかもしれない。』
この面白さと同時に危うさを、どこか意識に留めておいても良いと思う。特にデジタル化した画像データは、既にバーチャルな現実を提示しているが、一方で監視カメラや証拠写真という画像もまた、同じ画像なのだ。修正が容易というデジタルの特徴以外にも、証拠性に関して一抹の不安を抱えているとは言えないだろうか。

「神話的な時間」を廃棄しながら、別の妄想を生み出す大量画像消費時代は、ロラン・バルトの予測を超えているように思われる。

村上 慎二



Photo: 山内 啓司

RELATIONAL EVENTS

「ポーチやレジャーシートをつくろう! by CASA PROJECT」

12月6日(土)・7日(日) 11:00~16:00(最終日15:00)

遊木の森(あずま屋近辺) CASAタープ(約10×2.5m)を会場に設置／不用になった傘の布・ベルト・針・糸・はさみ・のり

アート作品が点在する中で、訪れた人と一緒にものづくりを行なうワークショップは少し異質だったように思えたが、アートと関わる機会が少ない来場者にとっては、親しみやすく参加しやすい空間になっていたと思う。

傘は人工的なもので自然と相対するものである。だが雨という自然を受け止める素材であるためか、不思議と遊木の森の豊かな木々と調和し、太陽光と風の力により傘の布は不用品とは思えない輝きを見せた。

HOUKO (CASA PROJECT 代表)



不用になった傘を新しく生まれ変わらせるプロジェクト。
テントやタープ等を使った空間演出の他、実際に作品づくりを体験できるワークショップを企画・開催。いつかは活動を終えることを目標に、日々傘を拾っては制作を続けている。2007年より活動スタート。
<http://casaproject.com>

RELATIONAL EVENTS

「秋の森づくり県民大作戦」

11月30日(日) 10:00~11:30／13:00~14:30

遊木の森 ●ゴンザレス・ウィルフリド＋静岡県中部農林事務所＋NPO法人しずおか環境教育研究会＋静岡県緑化推進協議会

アトリエ「遊木の森」へようこそ

しずおかり山体験学習施設「遊木の森」(静岡市駿河区古宿)で小学生親子を対象としたクラフト講座を開催しました。講師に現代美術作家ゴンザレス氏をお迎えし、自然素材を使ったアート作品作りに親子で挑戦しました。作品のテーマは「生き物」「柿鼻のトナカイ」「がぶがぶザメ」等、たくさんの生き物が「遊木の森」に誕生しました。イベントは作品の材料を集めるところからスタートし、作成、展示と行いました。ゴンザレス氏の指導のもと、家庭では作成するのが難しいダイナミックな作品を作ることが出来ました。子ども達の自由な発想による生き生きとした作品は、「遊木の森」の魅力を一層引き立ててくれました。

主催／静岡県中部農林事務所 企画運営／NPO法人しずおか環境教育研究会



「木を使ったインスタレーション」

11月29日(土)~12月7日(日) 11:00~16:00

遊木の森 ●大畑 実(NPO法人しずおか環境教育研究会理事)

空間と詩

Hutchinson ecological niche
n-dimensional hypervolume niche

多重次元転回構造 または、私の詩空間これは私の、2次元的投影図に過ぎない。



オートバイエーシスまたは創発

マキを一本置く。二本目は一本目の右隅に置く。これを繰り返す
散らばるマキがあり 何かに誘われて
うごめくものたちがいる カタカタと揺れる
膠着がうごめく ただそれだけのことでしかない
それでも何かが出来上がっていく
ふたおりの案山子悲しく
それでも少し メタボエムの風を舞う



学生作品展示

11月29日(土)～12月7日(日) 11:00～17:00(最終日15:00) 舞台芸術公園「カチカチ山」
常葉大学造形学部 2・3年生作品

木の造形、金属の造形、ガラスの造形、布の造形、複製表現、コンセプチュアルアート等の課題作品展示



常葉大学造形学部 作品出品者

- 青木 友佳
- 浅井 瑠衣
- 朝比奈 遼
- 伊東 勇樹
- 上田 優希
- 大橋 実加
- 小林 鮎子
- 齊藤 司
- 杉本 理奈
- 鈴木 陽介
- 高嶋 柚月
- 田方 里咲
- 高橋 愛
- 高村 弦太
- 中村 美憂
- 日高 遥奈
- 森下 真衣
- 吉永 知世



海外招聘教員作品展示：Jack Wax

11月29日(土)～12月7日(日) 11:00～17:00(最終日15:00) 舞台芸術公園「カチカチ山」
ジャック・ワックス(ヴァージニアコモンウェルス大学美術学部教授／クラフト・ガラス)

展覧会出品のために来日、常葉大学造形学部において講演「アメリカの美術教育と作品紹介」を実施



広報資料

ポスター兼用パンフレット／作品配置図／ホームページ／記録集



広報印刷物の仕様

ポスター兼用パンフレット

体裁＝展開A2判変型／観音開き4ツ折仕上げ
(仕上りA4判8ページ・たて型)

寸法＝展開サイズ:たて297mm×よこ836mm
(仕上りサイズ:たて297mm×よこ210mm)

刷色＝プロセスカラー4色／プロセスカラー4色

用紙＝Mr.B スーパーホワイト 菊判76.5kg

枚数＝4,000部

・ ・ ・

パンフレットを展開した状態で、おもて面・中面を天地・左右など交互に複数枚つなげるにより、場所にに応じてフレキシブルに掲示が可能なポスターとして兼用できるようにした。

鳥井 素行

作品配置図

体裁＝A4判よこ型

寸法＝A4判(たて207mm×よこ297mm)

刷色＝A面 プロセスカラー3色(M+Y+Bk)

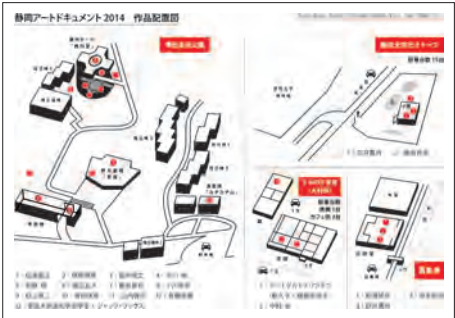
B面 プロセスカラー3色(M+Y+Bk)

用紙＝上質紙(白) 菊判62.5kg

枚数＝4,000部

A面＝会場見取図原案：ナガタ・ロッシ

A面



B面



第4回 静岡アートドキュメント 2014

・主催 静岡アートドキュメント実行委員会

・共催 SPAC—静岡県舞台芸術センター—

・協賛 **足もここちよく、観をうつくしく、**
AKAISHI

・後援 静岡県教育委員会 静岡市

・助成 公益財団法人朝日新聞文化財団

ふじのくに文化芸術振興補助金

・協力 常葉大学造形学部／教育学部生涯学習学科

静岡大学教育学部

NPO法人しずおか環境教育研究会

静岡県中部農林事務所

平澤地区町内会 萬象寺 大谷の古民家(大村邸)

中林 彩(常葉大学造形準備室)

・ ・ ・ 会場設営／運営協力

常葉大学造形学部

浅井 瑠衣 石田 亜衣 石間 克弥 板倉 さわ

伊東 勇樹 植田 佳果 大石 佳奈希 大橋 実加

加藤 朱莉 久保田 早貴 小田島 明日香 小林 鮎子

近藤 大輔 齊藤 司 左右田 一矢 杉本 雄太朗

杉本 理奈 鈴木 翔大 鈴木 陽介 田方 里咲

高嶋 柚月 高橋 愛 高村 弦太 中村 美憂 中山 夢

橋本 薫 日高 遥奈 廣谷 佳奈 福岡 千慶

前田 勝弘 望月 優文 森下 真衣 吉永 知世

常葉大学教育学部生涯学習学科

原田 裕女 堀川 菜月

静岡大学教育学部

池田 天衣子 石倉 伸彦 伊藤 嘉奈子 伊藤 美希

鈴木 美桜 村松 優香

展覧会 第4回 静岡アートドキュメント 2014

会場 静岡県舞台芸術公園／遊木の森／静岡大学ビオトープ
大谷の古民家／萬象寺

会期 2014年11月29日(土)～12月7日(日)

イベント シンポジウム(司会進行:柚木 康裕)
「静岡アートドキュメント」—地域のなかで、地域をこえて—
舞台芸術公園作品紹介ツアー(進行:岐部 琢美)
舞台芸術公園「橋円堂」朗読/パフォーマンス:村上 慎二
「CASA PROJECT」:HOUKO (CASA PROJECT代表)
「秋の森づくり県民大作戦」:ゴンザレス・ウィルフリド
「木を使ったインスタレーション」:大畑 実
コントラバス ソロライブ「tops 一場」 演奏:土田 卓
ビオトープスペシャルトーク:新妻 廣美
学生作品展示:常葉大学造形学部生
海外招聘教員作品展示:Jack Wax
各会場への無料巡回バスの運行:11月29日(土) 12月6日(土)

デザイン 鳥井 素行(鳥井事務所)

WEB製作 柚木 康裕(サポート:大石 佳奈希 大橋 実加 橋本 薫)

記録集製作 奈木 和彦

監修 夏池 篤

実行委員会 乾 久子

岐部 琢美

白井 嘉尚

長橋 秀樹

奈木 和彦

夏池 篤

蜂谷 充志

柚木 康裕

常葉大学造形学部造形準備室

TEL 054-261-1460

<http://art.panda55.com/adocs2014/>



SHIZUOKA ART DOCUMENT 2014